

福岡市

今津元寇防塁発掘調査概報

採集

一鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する

石築地の第二次(昭和43年度)調査一



昭和44年3月

福岡市教育委員会

序

本市では重点施策である「個性ある市民文化の造型」具現化の一つとして、わが国唯一の文化財である史跡元寇防塁の保存整備事業計画を策定し、その保存活用を促すため、国および県の補助を受け、前年度にひきつづき総合的調査を行いました。

九州大学鏡山猛教授を団長とし、九州大学文学部考古学、国史学、工学部建築学、水工土木学、冶金学、理学部地質学の各研究室をはじめ、福岡教育大学、熊本大学、宮崎大学、糸島高等学校郷土部、福岡営林署、福岡県福岡農林事務所、福岡県民生部、地元関係各位など、各方面のご指導とご協力を得て、今津地区史跡指定地とその周辺地域を対象に昭和四十三年八月から九月にかけて発掘調査を実施したところ、予期以上の成果をあげることができました。このことは、ひとえに関係各位の文化財に対する深いご理解とご協力に負うところが大きい証左といえましょう。現在生の松原、今津両地区では、保存施設工事を実施中で、昭和四十三年度中に工事をおわり、活用にご供することと存じます。

この調査概報が、研究資料の一つとして学界をはじめ各方面でご活用いただければ幸いです。なお、全体のまとめについては本報告を予定しており、今後とも関係各位のご指導とご協力をお願い申し上げます。

本書の発刊にあたり、調査および原稿の執筆を担当された各位、県教育委員会などのご協力に対して、深甚の謝意を表します。

昭和四十四年三月二十五日

福岡市教育委員会
教育長 長 東 正 之

例言 調査員および関係者は、巻末に列記したが、一は岡崎教、柳田純孝、二は佐藤浩、山本輝雄、下条信行、橋口達也、柳田、三は太田静六、土田充義、四は種子田定説、中村真人、湯湯藤和、辻和毅、松岡繁雄、若杉久志および遠藤尚、五は山内豊隆、時津俊次、安原一哉、六は川添昭二、七は岡崎、八は鏡山猛、岡崎、川添、柳田が執筆を担当した。巻末の付表一は遠藤、二今年年表は川添、三砥石の一覧表は岡崎、小田富十雄、下条、柳田が担当した。付図は下条、橋口、柳田、写真は下条、柳田の手になり、航空写真は朝日新聞西部本社航空部の好意によるものである。

今津元寇防塁発掘調査概報

正 誤 表

頁	誤	正
3	直角に一〇×五m	直角に五×一〇m
7	(分団区の地位) 二五×一〇m	(分団区の連閉) 二五×一〇m
8	(五×一五m)	(一五×一〇m)
9	(五×四五m)	(四五×一〇m)
10	花崗石と玄武岩	花崗岩と玄武岩
11	鉄鍍青金學教室	鉄鍍青金學教室
12	腐蝕で	堅緻で
13	著じるしく	著しく
14	緑色のもの	緑色のもの
15	今津砂丘の地質調査	今津砂丘の地質調査(分表一を照)
16	横わっている	横たわっている
17	千津氏	千英氏
18	尊卑分脈	尊卑分脈
19	埋まっている	埋まっている
20	朱成	朱武
21	明州(浙江省寧波)	明州(浙江省寧波)
22	正応四(一二八二)年九月二日	正応四(一二九二)年九月三日
23	大陸船載の陶器と銀匱	大陸船載の陶器と銀匱
訂止箇所	誤	正
Fig.1	各区のTrench	各区のTrench
Table.4	Table.4	Table.4
"	-1' 前面 28.0 56.2……	1' 前面 28.0 56.2……
Fig.5	NO.12 測量坑	NO.12 測量坑
付表3	蒙古碎石一覽表	蒙古碎石一覽表
"	長さ(m)	長さ(m)
"	} 吉田晃亮見報 松岡元吉	} 吉田晃亮見報 松岡元吉
"		
"	NO.16(京屋号)の報告・文致欄に『伏巻堀』(山田安栄)を加える	
"	NO.30の発見年月日欄に昭43.7を加える	
付図1	第一次調査地(42.3)	第一次調査地(43.3)
"	× 大8~9 (NO.19)	× 大8~9 (NO.18)
"	× (NO.10)	× 明40 (NO.19)
"	× 昭43 (NO.21)	× 昭43 (NO.20)
"	× 昭36 (NO.22, 23)	× 昭36 (NO.21, 22)

目次

一 はじめに……………	1
二 今津の防塁とその構造……………	3
1 Ⅰ・Ⅱ区の防塁……………	5
2 Ⅲ・Ⅳ区の防塁……………	7
3 防塁構造の総括……………	8
4 防塁周辺の関連遺跡と遺物……………	10
三 今津防塁構造の建築学的考察……………	13
四 今津防塁の石材と今津砂丘の地質調査……………	15
1 今津防塁に使われている石材……………	15
2 今津砂丘の地質調査……………	16
五 今津・生の松原防塁の土木工学的考察……………	20
1 今津防塁の砂の性質……………	20
2 防塁に対する雨水および地下水の影響……………	21
3 防塁の保存方法……………	22
六 文献からみた今津元寇防塁……………	23
1 今津地区防塁の築造負担額……………	23
2 今津地区防塁構造の変遷……………	23
3 今津地区の警備番役……………	25
4 口向の元寇関係史料……………	27
七 所謂「蒙古疑石」の発見……………	29
— 本没島・唐島の新拠！	
八 おわりに……………	33
付表 1 今津砂丘の比重・粒径・鉱物組織……………	
2 中世今津年表……………	
3 北九州沿岸地域における蒙古疑石一覽表……………	
付圖 1 蒙古疑米關係地図……………	
(付・各地区調査対照表)	

一 はじめに

わが国で元寇とよばれる十三世紀後半における蒙古襲来の事件は、テングスノーハーンにはじまりフビライにうつがれたモンゴル帝國膨張の波によってひきおこされたものであった。これはわが国にとつても深刻な問題であり、鎌倉幕府の存在基盤をほげしくゆるがした大事件であったが、この蒙古襲来が失敗したことは日本の事情ととも、マルコ・ポーロによって、西方の世界にもつたえられたのである。

中国大陸におけるモンゴル王朝は、フビライ（世祖）の時に、元とよばれた。フビライは高麗を攻めて服属させ、さらに江南の南宋を攻略した。わが文永十一年（元の至元十一年、一二七四年）元は高麗軍とともに、戦艦九百艘、三万余の軍隊をおくってわが国を攻めた。元軍は対馬、志岐をへて十月十九日博多湾に入り、今津に上陸し、百道原より海原、赤坂に至っている。幸い十月二十日の夜、博多湾をおそった暴風雨のため船の沈没するものが多く事なきを得た。

南宋を滅ぼした元は弘安四年（元の至元十八年、一二八一年）高麗、江南の二方面より、再び博多湾にせまった。六月六日には高麗よりの東路軍が博多に姿をあらわした。この際は、今津および肥前太宰に上陸することができず、志賀島と能古島の間に碇泊した。草野次郎経永、河野六郎通有、竹崎季長などが兵船で元船と交戦したのはこの時である。元軍の一部は志賀島に上陸したが、日本側はよくもちこたえた。東路軍と江南軍とは六月十五日、志岐で合流することになっており、東路軍の艦船は志岐に集結した。江路軍の出発はおくれ、七月に入って平戸島で東路軍と合流し、ここから博多湾に連撃を開始したのである。ところが、七月三十日の夜おそった大暴風雨によって、再び肥前隠岐島付近に集結していた艦船の主力は非常な打撃をうけた。こうして元の日本征服の夢は破れ去つたのである。

文永の役の経験にかんがみ、鎌倉幕府は太宰府、博多、今津を守るために、建治二年（一二七六年）、鎮西諸国の武士などを動員して異國警備の石築地を構築させた。この築置は三月にはじまり、その年の八月に完成ということになっている。

この石築地は、福岡市の香椎にはじまり、箱崎、博多、百道、生の松原、今宿をへて今津大原に至る約二〇里にわたり、現在「元寇防塁」とよばれるものであり、弘安の役に元軍がついに上陸することなくしておつたのは、この石築地（防塁）の構築が、一つの原因であったことはひとめなければならぬ。

この石築地は大正二年七月、福岡日日新聞社主催の元寇現地講演会の際、今津において二カ所が発見され、この際、中山半次郎博士によって「元寇防塁」の名があたえられた。築地地点は見沙門嶽の西方山笠二丁余の地点と、同じく山麓を距る約五丁の地点の二處所で、後者の石築地の

高さ海岸面四尺六寸、内面三尺三寸、厚さ十尺といっている。これと同時に万人塚（東蒙古塚）、千人塚（西蒙古塚）が調査された。発掘者は千人塚、万人塚はもともと古代の古墳であったものに、かまどをつくり蒙古製の器、日本軍が蒙古軍の戦死者をこのかまどで火葬に付したものと考えたのである。

大正十一年、内務省は考古官をおくり、泉の係員とともに各郡役所に博多湾沿岸各地の防塁の実状を依頼している。大正十二年より十三年にかけて福岡興興舘誌であった島田寅次郎氏に福岡市地行以東における防塁の調査を行った。昭和十六年にはおなじく興舘舘であった川上市太郎氏が泉の史跡名勝天然記念物調査報告第十四輯として「元寇防塁」地之巻を刊行したが、その中に「蒙古軍船碇石」、「元寇防塁」、「多可島考」をおさめている。博多湾岸に現存する防塁のうち今津の元寇防塁は、もっともよく保存されていた。昭和六年三月三十日、今津、今宿、生の松原、西新町、地行西町、箱崎の「元寇防塁」が史蹟として指定され、昭和八年より五九年にわたり、小松七万二千七百本が防塁の調査用に防砂用として移植された。

戦前は、のどかな市外であった今津も、福岡市の発展にともない、市部にとりいれられ、住宅も進出し、海水浴場などの施設がつけられ、急に破壊の危険にさらされた。昭和三十三年今津大原で道路建設の際あらわれた防塁について、福岡県教育委員会の渡辺正気氏らによって調査されている。

昭和四十三年度では、前年度の生の松原地区の防塁の調査にひきつづき、福岡市教育委員会の事業として今津地区の防塁の調査を行うことになった。前年度発掘された地城の保存問題もあり、福岡市の要望にこたえ、文化庁は平野邦雄、仲野浩、坪井清足技官らをおくってその実情を調査、文化庁として最大限の措置を申し入れ、福岡県教育委員会も協力をおしなされた。前年度にひきつづき、九大福山塚教授を団長とする九州大学文学部考古学、国史学、工学部建築学、水工土木学、冶金学、理学部地質学の各研究室や福岡教育大学・熊本大学・宮崎大学など各分野の専門家よりなる調査団により、発掘作業が実施された。

今津地区の防塁の発掘調査は八月十九日より九月十四日まで行われ、防塁線の分布、構造、石材産地、築造当時の地形復元など多大の成果をあげ、ほぼその目的を達することができた。

この調査には地元の方々、大原の部落の方々、婦人会の方々のあたたかい協力に負うところが多く、また糸島高等学校郷土部の諸君の協力もわすれがたい。また調査と平行して博多湾沿岸の防塁線の調査(三〇〇分の一)が行われ、今津、今宿、生の松原、煙浜、西新町、地行二丁目、箱崎をはじめ、各地域の測量図もほぼ完成をみたのである。

参考文献

- 山田安次「伏魔編」 明治二十四年
「筑紫史談會講義集」第一輯（中山平次郎、木下謙太郎氏の論文所収） 大正三年
「元寇史蹟の新研究」中田次郎、木下謙太郎、竹内宗哲氏の論文所収） 大正四年
池内 宏「元寇の新研究」一、二 昭和六年
須田二策「蒙古襲来の研究」 昭和二十三年
堀 豊「神風と敵艦隊伏の真相について」日大歴史一八六 昭和三十八年
山口 肇「源古集」元寇實史の記録 昭和三十九年
田中啓吉「物語元寇史」一 藤土辰雄編 昭和三十九年
福岡市教育委員会「史跡元寇防塁関係編年史料」 昭和四十二年
同 右 「福岡市史の松原元寇防塁調査概報」 昭和四十二年

二 今津の防塁とその構造

今津は博多湾の西北部に位置する。毘沙門山の麓から、柑子岳の麓まで、今津の海岸砂丘は、松林中に約三㎞にわたってつづいている。防塁は現在の汀根から南（陸側）へ約九〇mにある砂丘上に構築され、その最も高い地点は標高七mをはかる。防塁の南はゆるやかに傾斜して低くなり、砂丘の後背地には、東に今津邸落、西に大原邸落がいとままれている。

調査は西端、大原側を基点として毘沙門山の西麓までⅠ～Ⅳの四区にわけた。第一次の生の松原防塁の調査に従うと、石材の相違が石築地築造分根と一致することから、今津各区の調査にあたって構築法と石材の相違に留意することにした。

防塁に直角に一〇×五mを一トレンチとして設定し、Ⅰ区には三カ所、Ⅱ区には六カ所のトレンチを設けた。この他石材の相違する地点ではその境界に従い、防塁の前面に二、三カ所の小トレンチを設け、各境界ごとの長さの単位（分根区の単位）の究明につとめた。

Ⅲ区では、長い二つのトレンチを設けた。一は三五×一〇m（Ⅲ区Ⅰ）とⅢ区Ⅱ、一は四五×一〇m（Ⅲ区Ⅲ）をはかり、防塁の保存状態もよく構築当時の現状をよくとどめていた。この地域の調査には調査後の史跡の復元、保存があらかじめ考慮された。

Ⅳ区は砂丘の東端にあたる。砂丘上の防塁の端が、両側の山裾とどうつづくのか、此の松原では明らかでなく、今津砂丘より毘沙門山麓につらなるⅣ区Ⅰトレンチは、今次の調査の最後の重点となった。

八月十九日開始され、九月十四日に終了、約一カ月にわたる調査の前半は、発掘作業を主とし、後半は各地区の実測、石材の調査を中心にするめられた。また各区で砂の粒度分析が行われ、周辺の地質調査、遺跡の分布調査、当時の地形復元作業も併行して行われた。

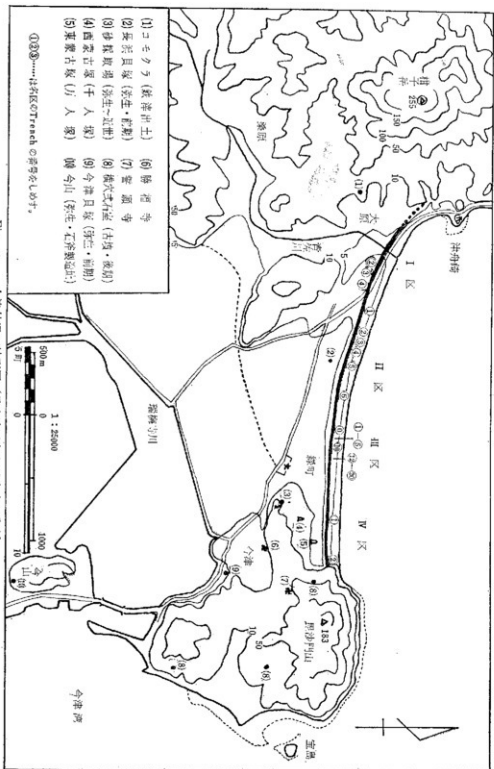


Fig. 1 今津付近の地形図 (元寇跡および遺跡の分布)

いま、防塁の構造について、砂丘の西にあたるⅠ・Ⅱ区、東のⅢ・Ⅳ区にわけて説明する。

Ⅰ・Ⅱ区の防塁

西の端を基点とし、砂丘のはば中央地点までをⅠ・Ⅱ区の調査区とした。発掘前の防塁の保存状況、石材の分布をもとに、Ⅰ区（大原部落）に三カ所（Ⅰ区一・二・四）、Ⅱ区（長狭部落）に六カ所（Ⅱ区一・一・六）のトレンチを設定し、西の大原側から順次東へ掘り進めた。

各トレンチの石材は、花崗岩を主とするところ（Ⅰ区一・二・四、Ⅱ区一・二）、玄武岩を主とするところ（Ⅱ区一・四・五）、花崗岩と玄武岩が接線をもってはつきりわかれるトレンチ（Ⅱ区一・三・六）に分類される。Ⅱ区一から西では花崗岩を主とし、東側では花崗岩と玄武岩がほぼ同じ割合で分布している。Ⅰ区一・三、Ⅱ区一・二・三では防塁の内部構造、構築方法を調べるため断面をみることにした。

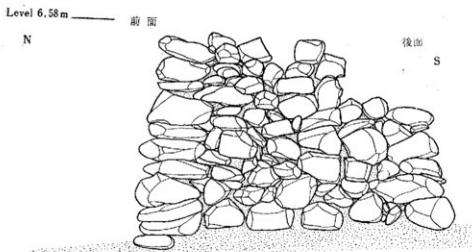
高さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	長さ (cm)	重量 (kg)	備考
170	30.0	17	23	33	150 (上面) 4~6段積段 上
150	38.4	25	18	61	
100	59.2	18	17	55	
80	61.0	30	16	58	
100	65.0	13	17	50	80 下段積段 下(底面)
80	110.8	22	55	50	
0	121.6	25	55	60	
0	130.0	40	35	60	

Ⅰ・Ⅱ区を通じて基本的構造はⅠ区一・三に代表される。前面の現在高二・六〇m、後面の高き一・四五m、底面の幅三・一〇m、上面の幅二・五〇mの台形の断面をしており、石質は花崗岩である。自然の砂丘上に、底面には長大な石を前・後列に相対して置き、その間を小石で詰め、前面（海側）にはほぼ垂直に立ちあがり、一〇〇〜一二段に積まれる。後面は傾斜を持ち、七・八段に積まれる。前・後面とも下部ほど大きな石を積み傾向にあり、内部は小塊石と砂とが入り混って積み込まれている。上面は後面に向かって傾斜しており、小さな石を使用している。(Pl. W-1) 前面のもっとも高いところはⅡ区一・五で、二・八三mをはかり、Ⅱ区一・三・五では前面に防塁構築後の落石が見られた。

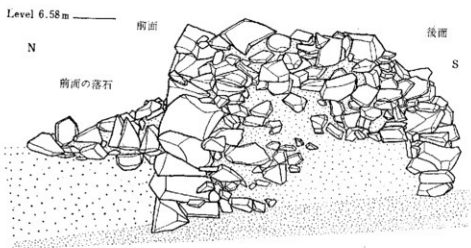
Ⅱ区一・二では、防塁前面に積まれた石材の重量を玄武岩側で測定した。(Table 1) 前面の現在高一・七〇mの間に六・八段の石積みが見られ、6と7の間がほぼ中間にあたる。下段には一〇〇kgを越す長大な石が普遍的に認められ、上段には一部に大きな石がみられるが、下段の1/2程度の大きさの石が多く利用されており、平均六〇kgとなる。力学的にも安定した形となっている。

Ⅱ区一・三においては異なる石材の接合線の上面の傾斜の相違とともに、底面の石の高さが玄武岩側と花崗岩側で違いが、それぞれ内部の構築方法を異にする。(Fig. 2, Pl. W-1) 依然

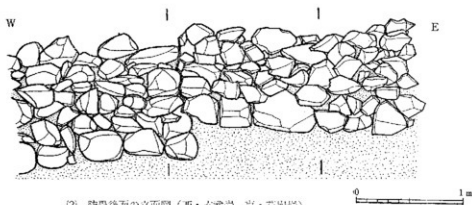
Table 1 今津長浜防塁前面の石とその重量 (Ⅱ区一・二)



(1) 西・玄武岩側の断面図



(2) 東・花崗岩側の断面図



(3) 防壁後面の立面図(西・玄武岩、東・花崗岩)
Fig.2 今津・長浜の防壁実測図(Ⅱ区-3)

と石積みされた玄武岩側が最初に構築され、接合線より西へ向って築かれていることがわかった。玄武岩の接合線から西へ一〇・五mの地点で花崗岩にかわり、花崗岩は接合線から東へ一〇・二mで玄武岩との境界をみる。花崗岩側は東一〇・二mの玄武岩との接合線を基点に西へ構築をすすめ、トレンチ西側の玄武岩へ接続させたために基底部の高さが一致しなくなったことをしめしている。これは、玄武岩側と花崗岩側の防塁構築の分担者が異なることによるもので、玄武岩の一〇・五m、花崗岩の一〇・二mは、それぞれ分担区の長さ（範囲）をしめしている。Ⅱ区からⅢ区にかけて玄武岩と花崗岩の境界を調べることで、分担区の単位をもとめた。（3 防塁構造の総括で説明）石材の境界が多く見られることは、防塁の構築が細かく分進されたことをしめしており、Ⅰ・Ⅱ区では西の大原側へと石積みされ、全体を仕上げている。

防塁の構造が全くちがうのはⅢ区一六で、防塁全体のほぼ中央にあり、後方に広い傾斜面を持つ。防塁の高さは低く、傾斜面の砂の上に小さな石を置いた状態で、前年度調査された生の松原A・B地区の構造に似ている。

2 Ⅲ・Ⅳ区 の 防 塁

Ⅲ区は今津小学校の北、緑町にあたり、Ⅳ区一は、大正二年に発掘された地点に近い。Ⅳ区一は尾沙門山西麓との接合部である。

Ⅲ区は一〇〇mのトレンチを設定し、西から五mごとにⅢ区一・二・三……二〇とした。地形ではⅢ区一・二〇が高く、前面の現在高は二・〇五mで西へ傾斜してⅢ区一が最も低くなっており、前面の現在高はわずか〇・五〇mにすぎない。その西側は再び高くなる。砂丘の高位のところほど防塁の残りがよいことから、Ⅲ区一の西四二mの最も高い地点にトレンチを設け、Ⅲ区一〇とした。前面の現在高は二・六〇mで、ほぼ原形に近い状態をとどめている。石質は玄武岩である。発掘区はⅢ区一〇、一五（五×二五m）、一〇、一二（五×四五m）であるが、発掘の結果によれば、防塁の残存状態は現地形の高低に一致している。

Ⅲ区一・二・二〇を全面発掘した結果、前面で石質、石材の大小等による相違が認められ、防塁の分担区画がはっきりした。（Table 3）防塁の後面においても石質、石の大小および基底部の石の高さのずれが、前面の石材の境界に一致している。これは防塁構築の際における工人の班編成、あるいは所有地の段別による防塁の分担区域をしめすものとして興味深い。Ⅲ区一・一五においても花崗石と玄武岩の境界が確認された。前面はほとんど落石がみられないが、後面はくずれた部分が多い。一般に前面と背面の基底部の高さは、後面の方が二〇〜四〇cmほど高くなっている。後面のくずれた部分は、石材が一塊にくずれ落ちた状態で、その圧力により前面の高さと同じ高さまでくずり落ちている。防塁の断面は前面が二・七〇〜三・〇〇mに対して、上面の幅は二・〇〇〜二・六〇mの台形を呈する点で、Ⅰ・Ⅱ区に共通する。

IV区—ではIII区と同様石材の境界（花崗岩と玄武岩）が確認された。IV区—は毘沙門山との接合部である。防塁の延長部分にあたる山腹の斜面に、古墳のふき石状に石を積み、後面は敷段に石を積み重ねている。山腹の傾斜に沿って防塁は高く、最も高い部分の高さは四・三〇mとなっている。この地点からは青白磁片四点（いずれも底部）が出土したが、蒙古襲来前後のものとしてさしつかえないであろう。

III区—の上面及びIV区—で鉄滓が発見され、現在九州大学工学部鉄滓冶金学教室で分析が行われている。III・IV区の防塁の石材は玄武岩が主で、花崗岩が一部に見られる。玄武岩は、現在毘沙門山北側の碑石場で採掘されている石材と同一のものであり、防塁築造時も毘沙門山麓から切り出し、構築したものと思われる。

3 防塁構造の総括

構造 第一次調査の行われた牛の松原地区では、防塁の後面裏が粘土で補強されていたのに対し、今津地区砂丘上の防塁には粘土は全く使われておらず、構築上の相違をまず指摘できる。

Table 3によると、防塁基部の砂丘の標高はI・IV区の各トレンチで差が認められ、東が高く、ゆるやかな起伏をしながら西に傾斜する。防塁の構築は自然の砂丘を利用しその上に石が積み上げられている。基部の前面が後面より低いことは、防塁の立地する砂丘が南から北へ（海岸にむかって）傾斜する地形上の特徴によるばかりでなく、一般に前面は幾分掘りこまれ、安定した砂丘の上に整然と石を積み上げることによって、より強固な防塁を築く構築上の意図によるものである。各トレンチの前面は、他の部分より大きな石がえらばれ、基部部ほど安定した大きな石材が配され、このことは各区のトレンチに共通してみとめられる。

防塁の断面調査による特徴上の特徴は、前面に最も大きな奥行の長い石を整然と積み上げ、裏込めの石によって傾斜角度を七六度から八六度に保っている。後面は前面よりわずかに小さな石が利用されており、防塁の安定を保つための傾斜角度は前面よりゆるく、七〇—八〇度となっている。II—・V区を除いて前面はほとんど礫石がみられないのに対し、後面の崩壊及び礫石の多いことは、前面より石が小さく、しかも奥行の長い石が少ないために不安定となり、角度がゆるいため一層上部の石がすべりやすくなった結果をいしている。四十四年二月、III区—・II—・V区—の保存工事に伴う補足調査では、後面は構築完成後、次第に不安定となり、下部の石が上部の石を支えることができなくて、崩壊する傾向となり、中ほどの石が押しだされ、崩壊していることが確認された。

前面、後面は規則的な積み方が施されているのに対し、内部の石は不規則に積み込まれたところが多い。基部部の幅は三・m内外に対し、上面

（堀口 注也）

Table 2 今津区連防壁石材の分布(Ⅱ～Ⅲ区)

No.	石の種類	分用区の長さ(m)	備考
1	玄武岩	29.8	測量杭60から
2	花崗岩	12.0	測量杭28.3m Ⅱ区-1
3	玄武岩	17.1	Ⅱ区-2
4	花	26.8	Ⅱ区-2
5	玄	16.4	
6	花(玄)	41.2	
7	玄	10.5	Ⅱ区-3
8	花	10.2(PL. VI-1)	
9	玄	13.8	Ⅱ区-4
10	玄・花	20.2	
11	花	10.2	
12	玄	120.3	測量杭60から 西へ20.6m Ⅱ区-5
13	花	37.5	
14	玄	40.0	
15	花	18.3	測量杭60から 西へ5.2m(Ⅱ区-6)
16	玄	15.1	
17	花	8.0	
18	玄	125.7	
19	花	44.6	
20	玄	42.4	測量杭670から 東へ0.4m
21	花	10.1	
31	玄	7.3	Ⅲ区-12
32	花	10.5	測量杭60から 東へ8.2m (PL. VI-2)
33	玄(変)	9.0	Ⅲ区-15
34	玄(変)	4.2	
35	玄(変)	4.6	
36	玄	6.6	
37	花	7.3	Ⅲ区-20

- 注 * No. 1の西は花崗岩、No. 21の東は玄武岩が主体を占める。
 ** 測量杭は西から20m間隔に61～63までである。
 *** 花(玄)は花崗岩中の一部玄武岩が含まれ、花・玄はほぼ同じ割合で合っていることをしめす。
 **** 63～35の(変)は変成岩。

は二・五mと狭く台形状を呈し、安定した形となっている。今津地区では生の松原地区に比べ幅を広くとり、前後を距厚的に積み上げるとともに、台形状に仕上げること、粘土を必要としない安定した防壁を築くことができたと思われる。構築はまず前山および後面に石を配し、同時に中ほどの石を積み入れることによって順次高く仕上げたといえる。

生の松原A・B地区では後面の背後に砂丘の傾斜を利用して配石がみられたが、今津地区にはみられない点も構築上の異なる点である。ただ、Ⅱ区一六では基底部の幅が四・三mと広く、後面の傾斜がゆるく、傾斜面に石がみられた点で他のトレンチと区別され、生の松原A・B地区との関連を考えることができる。

砂丘の西に堆子岳の山壁へつながる地帯として開削がすすみ、原地形をとどめないため、砂丘上の防壁が山壁湾へつながる状態をみることはできないが、古老の岩などを手がかりとして山壁丘陵面へ接続する防壁を復元することは可能である。これに対し、東端のⅣ区一二で尾沙門山麓と砂丘上の防壁との接合部が発露された。西へ傾斜する山麓の丘陵面を利用して、後面は各区と同じ傾斜角度をたもち、六・七段の玄武岩の円礫が積まれるのに対し、上面から前面へ傾斜する丘陵面の上に配石された状態をみる。砂丘上の防壁が山壁へつながる部分はこれまでの報告になく、今回の調査によりはじめて明らかにされたわけで、新たな知見を加えることができた。前面にゆるく傾斜することは、防壁の役目を全く果さず、砂丘上の防壁とは性格を異にする。防壁の前へ降りやすい形となっており、付近の字名が「門戸口」、「門戸」と呼ばれているとと考えると、防壁前面への出入口の役割を果たしていたとも推測される。今後なお検討を加えてみたい。

石一材生の松原地区では、防塁の西側は長垂山のバグマタイト(巨層花崗岩)により、東は小戸岬一帯の砂岩によって築造されていた。

今津地区では、Ⅱ区―Ⅰの西は花崗岩を主体として構築され、Ⅲ区から東は玄武岩が主体を占める。花崗岩は角礫が多く利用され、玄武岩は円礫が多い。Ⅱ区―Ⅰの東のⅡ区からⅢ区にかけては花崗岩と玄武岩が一定の単位で交互に認められ、ほぼ同じ割合で分布する。これを右の表にしめす(Table 6)。石材の境界の長さは必ずしも一定していないが、石材は20mを超えない長さで接するのが一般的で、表中には更に細分される箇所があると思われる。Ⅱ区―Ⅲでは玄武岩と花崗岩が隣接し、石材を異にする両区はそれぞれ東側から同時に防塁の築造にかかり、西側へ接させることで仕上げている。Ⅲ区―Ⅰ(2)・Ⅱ(0)の前面および後面は、それぞれの分垣区ごとに石積みの方角が少しずつ異なっており、接合されている。石材の境界はⅡ・Ⅲ区だけでなく、Ⅰ・Ⅳ区でも確認された。「養老日記」楚録には段別一寸の石築地の構築を促した記録がみえ、防塁の築造にあたった御家人の所領に応じて分垣する長さが決められたと考えられている。これに従えば、Ⅱ・Ⅲ区の石材の長さが一定しないことは、分垣者の所領が異なることによるもので、逆に分垣区の長さをともに所領を推定できることになる。今津地区は大隅、口岡の分垣とされているが、その境界を明らかにするにはなお検討を加えなければならない。

花崗岩は津波崎に露頭があり、宮の流、芥隈等糸島半島の海岸一帯に分布し、玄武岩は現在思沙門山で採掘されているほか、今山・熊古島に分布する。石材の最も近い搬出地をもとに考えると、防塁の西側は津波崎の花崗岩により、東側は思沙門山の玄武岩によって構築されたことになり、砂丘の中央部にあたるⅡ・Ⅲ区では両者が同じ比率で利用されている。また、Ⅱ区―Ⅱ・Ⅲ、Ⅲ区―Ⅰ(0)の底面の石にはオオヘビガイ、カキが付着しており、海岸の波にあらわれた石が使用されていることをしめしている。

一方、Ⅳ区―Ⅱで発掘された青白磁は防塁構築前後のものと考えられ、Ⅳ区―Ⅰの東、砂採取場では宋代龍泉窯の青磁とともに、中世の瓦器が多量に出土した。大原部落の南、元岡からは宋代同安窯の猪背青磁が採集されている。Ⅲ区―Ⅱ(0)、Ⅳ区―Ⅱ、砂採取場およびコマクラ等で見られた鉄滓の分析結果と合わせて、防塁構築前後の生活を復元しうる資料を得たことは今回の調査の成果として特筆される。

以上、詳細は本報告にゆずることとし、防塁構造を概括するにとどめた。

(柳田純孝)

4 防塁周辺の関連遺跡と遺物

防塁の調査に伴行して周辺の関連遺跡・遺物の発見に努めた結果、防塁築造期を含む中世の遺物を出土する跡跡が確認されたので、ここにその概要を記す。

遺跡 IV区一の南に最近まで墓地として利用されていた標高八〇mの砂丘上に遺跡がある。大正二年、その一部が調査された西蒙古塚の南一五〇m、海岸線から四五〇mの地点に位置する。現在砂塚集場となっており、防塁調査期間中の砂取作業中に発見されたものである。遺跡は広範囲の包含層をなしており、多量の瓦器、青磁、須恵器、鉄滓等が出土した。そのうち防塁と関連のある中世の瓦器をえらび、これを要示する。(Pl. 3) 以下図に従って説明する。

遺物 土器は若干の石英小粒を含むが、概して良質胎土を服用し、焼成は柔らかな感じを持つが、いずれも堅緻で瓦質土器といえるものである。内面は淡褐色〜赤褐色を示すものが多く、外面は灰色〜灰黒色を呈するものが多い。煤が土器の外面に付着しており、実用の煮湯に使われたことをしめしている。

土器 1 口径二九cmを測る。直立に近い起ち上がりのみせた胴部が口縁部で内彎のカーブをみせつつ外反する。内面赤褐色を呈して、粗い間毛整形の跡をみせる。外面は煤が全面に付着し、表面の凹凸が残されたままで、十分に器表面の調整が行われていない。石英小粒を多く含む胎土であるが、焼成は堅緻である。

土器 2 口径二六cm。直立した鑿削形が、鋭く反転し、先端部を一段と厚く仕上げた口縁部を形成する。内面淡褐色を呈し、内面屈折部以下にはきわめて細かい刷毛痕がみとめられる。外表には煤が全面に付着し、器壁の凹凸がはなはだしい。口唇部の直下に流線が一条めぐらされているが、不規則なゆがみの著しい沈線である。良質胎土を用い、焼成も良好である。

土器 3 口径二五cm。わずかに内彎の感じを示しつつ、直立気味な口頸部の起ち上がりをみせる。内面淡褐色を呈し、表面平滑である。外面は煤のため黒色を呈している。胎土は若干の石英小粒を含むが良質で、焼き上がりも固くしまつて良好である。直立、あるいはそれに近いカーブの起ち上がりのみせる。これら1〜3の土器の全姿は不明確であるが、器の外面面に全面的に煤の付着が見られることから、煮湯用具として使用されたものである。

土器 4 口径二〇cm。直立した口縁の下方面二cmのところ、高さ二cmの鋤状の凸帯を、糸めぐらしている。内外面ともに淡黄色をなすが、外面の鋤より下側には煤が付着し灰黒色を呈している。胎土、焼成とも良好である。

土器 5 口径二二cm。ほぼ直立した口縁下には、扁平な、上面きのとつて状的部分的な粘土帯が付されている。これは土器4の鋤と同様の役割を果すものであろう。この粘土帯の影になる本体の部分には、紐かけ孔が、二孔穿たれている。直立した器体は下底部で急角度に内面に屈折する。

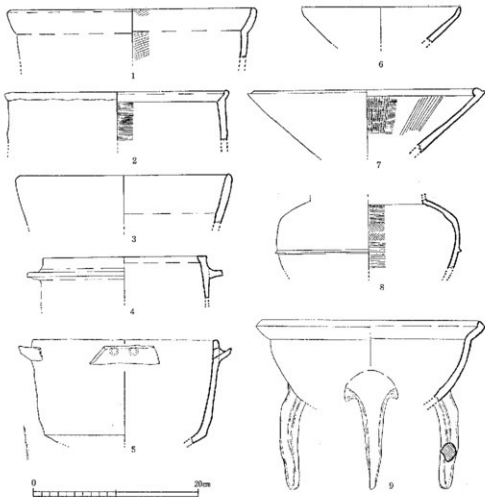


Fig. 3 今津砂浜集出土の陶器遺物 (瓦器)

内面淡褐色をなし、外面は貼付帯より上部以外は全面採でおおわれている。器底表面の凹凸が著しくしく、胎土、焼成とも良好。4・5は甕とともに使われた釜あるいは鍋に相当する器である。

土器6 口径一九cm。火に罹って表面が荒れている。外面には灰が濃厚に付着している。胎土、焼成とも良好。鉢、碗形土器。

土器7 口径二八cm。浅鉢型土器。内面黄褐色、外面灰色。内面には横の刷毛目の上から九木の櫛歯が縦に施されている。外面面の凹凸が口径下三cm以下の部分に特に認められる。細砂粒を含むが、良質の胎土はがっちり固く焼き上げられている。習鉢あるいはその先駆的なものか。鉢形、燗歯痕ともに同型の例が厚狭国府より多量に出土している。

土器8 頸部および胴部を欠失している。内面指板の跡を縦横な刷毛で整形を試みているが十分でない。灰黑色を呈す。外面は黒色を呈し、研磨され平滑である。甕形土器か。

土器9 土胎で口径二六cm。胴の深さ推定一〇cm。口縁末端を三角形状に一皮厚く仕上

げている。器表面灰色を呈し、外面には煤が付着している。内面の屈折面以下は粗い刷毛整形が施され、外面の間凸はげしく器表面の調整は十分でない。其伴出土の他の陶器形の裏面には正方形の格子印が施されている。跡は一つしか発見されていないが、他例より考えて三 equal になることは間違いない。接合部は貼付けを指先で押さえている。平型ねで、外周しつづ先細りになり、先端は丸くなっている。高さ一二 cm。器形、成形技法とも馬防周府出土の上層と全く同一である。この種土器は大坂湾沿岸や長門周防、豊前等の瀬戸内海沿岸に出土例をみていたが、北九州にも存在する事がはじめて実証された。その意味でも貴重な発見といえる。以上の諸遺物は鎌倉・室町時代の中世の瓦器で、水遣物だけで、詳細な時期判定をすることは困難であるが、中世の生活実体を具体的に知りうる重要な遺物である。

参考文献

- 小山宮土器、露久橋師、防長地方の中世土器
福山敏男、小田、露久、洞窟地域の考古学的調査一（『周防の国術』所収）防府市会公
九州考古学、五、昭和三十六年
昭和四十二年
昭和三十二年

二、今津防塁構造の建築学的考察

石の分布が異なるように各々の築塙場所でも多少の構築方法が異なる点もあるが、今は築塙を行った結果の全体を巨視的に見て要点のみを述べよう。防塁の高さ、幅、傾斜、石の大きさは表に示す通りである。（「JEP. 3」）防塁の前面が後面よりも急な傾斜をしたのは台形である。後面が傾斜を持っていることは大正二年七月の発掘報告（『明治以前大日本土木史』土木学会編昭和十一年六月一〇三頁）と異なっている点である。次に石の大きさの分布状態で注意すべき点は、比較的大きな石を前面と基部に、次に大きな石を後面に、比較的小きな石は内部に入れていることである。石と石との間隙に砂を入れて全体を密にしている。しかし砂そのものは構造的には意味をなしていないようである。つまり、力の伝達はしていないということである。

最後に、簡単に構築方法を述べると水平を維持しながら積み重ねていった。前面、後面を先に築いて後に内部を埋めるということではなく、前も後も内部も一緒に右の上に石を積み重ねた。加工していない石を築くには、この方法しかなかったであろう。石と石の間隙には砂を入れていった。内部には縦方向に長い石がいくつか入っている。これは石をたたいて押し込むようにして、全体をしめる役割をさせる方法として用いたのではないかと推測されるのである。

（九州大学工学部 太田福治著）

Table.3 今津防壁の構造一覽表

区	No.	現在の高さ(m)		幅(m)		傾斜(度)		基礎部の石の大きさ(cm)		基礎部のLevel(m)		実	注
		前面	裏面	前面	上面	前面	裏面	前面	裏面	前面	裏面		
I	2	1.80	0.90	2.02	2.60	79	70	20	50	3.22	3.76	真野・西	
	3	2.60	1.45	3.10	2.50	85	73	28	54	3.02	3.71	立四・日本・朝川・高倉	
	4	1.78	1.00	2.70	2.30	81	72	31	64	3.18	3.71	真野・西	
	1	1.40	0.80	2.80	2.50	86	70	34	65	3.80	4.50	真野・西	
II	2	1.70	1.40	3.05	2.60	86	74	—	45	4.03	4.01	佐藤(池)	
	3	2.00	1.10	2.90	2.60	84	81	30	50	4.46	4.74	真野・西	
	4	2.12	(前面のみ発露)			85	—	—	—	4.32	—	山本・高倉	
	5	2.83	2.22	3.48	1.94	77	75	20	40	4.09	4.51	山本・高倉	
	6	1.60	1.20	4.30	2.60	76	31	49	60	4.02	4.02	山本・高倉	
	III	0	2.60	1.90	2.80	2.00	84	73	—	—	4.48	5.18	山本・龍井・高倉
10		1.65	1.40	2.00	2.60	80	70	—	—	4.88	5.12	佐藤(池)・宇小川	
14		2.00	1.60	2.80	2.30	83	80	34	34	4.99	5.35	龍井・高倉	
20		2.05	1.90	2.70	2.50	85	80	31	36	5.04	5.04	龍井・高倉	
IV	1	1.36	—	—	—	85	—	30	42	4.78	—	真野・西	
	2	4.30	1.30	7.15	1.20	30	70	—	—	6.29	7.73	佐藤(池)・須門・真野・須門・松葉・池	

注・表中の傾斜は全て実測値によった。「石の大きさ」はそれぞれの部分の平均的な石を意味す。

四 今津防禦の石材と今津砂丘の地質調査

1 今津防禦に使われている石材

防禦に使われている石材の種類、各々の個数比を区別に明らかにし、併せて石材の採集地を推定する目的をもって、まず石材の肉眼的・顕微鏡的觀察を行い、岩石の種類を細別し、それぞれの性状、個数比を明らかにした。その概要を簡単に述べる。なお、各種岩石の採集地を推定するためには、周辺地域の地質調査と詳細な岩石学的研究が必要であり、今後の課題である。

(九州大学地質学部 種子山研究室)

(1) 石材の種類

A 花崗岩類 Granites

Quartz, Feldspar, Biotite を主成分とする深成岩

Ga アブライト質のもの

Gw 白色の長石を含むもの

Gp 桃色の長石を含むもの

B 変成岩類 Metamorphic rocks

片紋岩その他類珪基性岩の変質岩、或岩の変質岩、角閃石、片岩、片麻岩など

Mb 黒色のもの(片紋岩のもの多し)

Mu 超塩基性岩類のもの

Mg 緑色のもの(斑岩類のもの多し)

Ms 片状組織の著しいもの

C 玄武岩類 Basalts

Olivine, Pyroxene, Plagioclase を主とする黒色緻密の火山岩

D その他

砂岩 礫岩などの堆積岩

英岩 Porphyrite (斑状組織をもつ深成岩)

博多湾の西部、糸島半島と背振山塊の間に、海拔5m以下の低地帯が今宿から加布里にかけて東西に横わっている。その東縁にある春山、尾

(1) 今津砂丘の地形

2 今津砂丘の地質調査

Tab. 4 今津防壁の石材の岩種別個数比

	花崗岩類 (Ga, Gp, Gw)	安成岩類 (Mb, Mg, Ma, Ms など)	玄武岩類 (伊に連名、 砂岩その他 を含む)	露別個数
I区—2 前面	77.8%	22.2%	0%	36
後面	57.9	42.1	0	19
—3 前面	55.3	40.4	4.3	47
後面	52.1	48.0	0	46
—4 前面	58.5	37.7	3.8	53
後面	69.4	28.5	1.6	62
II区—1 前面	51.5	42.4	6.1	33
後面	92.3	7.7	0	91
—1 前面	28.0	56.2	5.8	68
—2 前面	77.1	22.9	0	35
—3 前面	48.0	23.0	29.2	48
後面	66.3	7.2	26.5	181
—4 前面	20.5	30.4	43.3	141
—5 前面	6.1	16.6	77.3	181
後面	0	1.2	98.8	172
—6	34.9	32.5	32.1	112
3区—0 前面	1.8	86.2	12.1	116
後面	0	90.8	9.2	98
—1~5	14.3	11.7	74.3	323
—12	0	90.2	9.8	32
—20 前面	0.2	46.6	53.3	1046
後面	63.9	35.3	0.6	1562
4区—1	10.1	35.4	54.5	99
—2	3.1	29.3	67.5	147
全区	31.2	36.0	32.7	5148

注 * I区—4、II区—1は花崗岩類を主とする部分と、安成岩を主とする部分に分かれるが、一まとめにして岩種別個数比を算出した。

** III区—1~5は花崗岩類を主とする部分と、玄武岩類を主とする部分に区別されるが、一まとめにして岩種別個数比を算出した。なお、各岩種の細別、それぞれの性状、傾度比などについては本報告で詳述する。

沙門山、今山などの孤立丘があつて、これらの孤立丘と津舟崎、長垂山などを結ぶ今津、今宿の砂丘が発達している。

昔長山嶺から北流する雷山川、瑞穂寺川は山麓に扇状地を作り、瑞穂寺川は糸島低地帯東半部を貫流し、その開口部では川幅が狭がり、湾口が閉じられた内湾または湾入河口の干潟（灘汐泥原）の状態を残している。糸島低地帯東縁北側を限る今津砂丘は、毘沙門山と津舟崎の間を結び、東西に長さ約三㎞、幅狭大約五〇〇mである。その北縁は博多湾に凹面を向けたゆるやかな弧を描き、南縁は多少屈曲を示して瑞穂寺川下流の低地に接している。

砂丘本体は海拔五m程度以下の平坦面を作り、東に向つて徐々に低くなる傾向を示す。南縁に沿い吾山、長浜、今津小学校付近にはかすかな高まりがあつて西微北から東微南の方向に進行し、東西に走る現海岸線と斜交しつつ、砂丘南縁の屈曲と相関を示している。砂丘北縁には海拔六〜七m程度の高まりが現海岸線に平行に相次ぐ続き、浜堤状砂丘を作っている。浜堤状砂丘の南側は急傾斜して砂丘本体の平坦面に接し、その間にかすかな凹地を見ることがある。北側はゆるく海に向つて傾き、高さ三〜四mの海蝕崖で切られている。この北側の緩斜面は一種の縦列砂丘を思わせる起伏を見せるが、松が造林されたためはっきりしない。以上を今津の新砂丘とする。

海蝕崖は中程の緩斜面で上・下の小海蝕崖に分けられる。この緩斜面には草木が着生しているので、上位の小海蝕崖は最近の異常暴風によるものと思われる。下位の海蝕崖が現在のものである。今津砂丘の東端、毘沙門山に接する部分には砂丘本体に比べかなり高く（海拔一三m）、北に向つてかなり急に傾いている。この部分は風に運ばれた砂が毘沙門山にさえぎられ、吹き上げられたように見えるが、後述するように、その下に上述した新砂丘より古い砂丘があるので、この部分を今津の古砂丘と呼ぶこととする。

今津砂丘の北半部には松林が造成され、南半部は畑地である。西縁には大原の部落がある。

② 今津砂丘の地質

発露された防壁は浜堤状砂丘の被覆下に位置しており、トレンチのすべての断面で、防壁の基礎となった基盤砂層の上に風成砂層が乗っている。一見したところ、風成砂層は基盤砂層に比べ粒が細かく、粒がそろつており、直径の歪みや、貝殻の微細な破片による偽層理が著しく発達する。層理の走向は防壁に大体平行し、傾斜は北側で北斜、南側で南斜する。防壁の北側基礎に接する部分では南に傾く事も多い。この風成砂層の間に二枚以下の有機物に富む暗色帯を挟むことがある。

基盤砂層は風成砂層に比べて粒が粗く、貝殻の大きな破片を含み、葉理が無く、塊状に見える。基盤砂層と風成砂層の間には明らかな境があ

り、礫や有機物に富む層が介在している事がある。この境界面は砂丘本体の平坦面よりいくらか高く、西から東に高くなる傾向を示している。Ⅲ区—Ⅰ〇で実施したオーガー・ボーリングでは、約二・六mの風成砂層の下に、粗粒砂層一・四m、極粗粒砂層一・二m、粗粒砂層一・六m以上の順で重なっている。極粗粒砂層の上部四〇cmは貝殻の円磨された大きな破片を多数含み、波に打ち上げられた後海岸 (back shore) の堆積物と見なされる。Ⅲ区—Ⅰ〇の基底部の高さは四・五m (前通) となり、現海面より二・五〜三mの位置にある。基底砂層上部の重鉱物含量や不透明鉱物の割合は風成砂層に近い。最後の時期に堆積した砂浜の堆積物であろう。

砂丘本体の平坦面を作る堆積物の露頭は殆ど無い。大塚部落内の下水道工事現場では、厚さ約一・五mの基底砂層と同様な砂層が見られた。長浜貝塚付近のトレンチとオーガー・ボーリングによると、一・一〜一・五mの粗粒砂層の下に約一m以上の粗粒砂層があるが、粗大な貝殻片を含む堆積物は認められない。

以上の資料より判断すると、今津砂丘の本体は沖洲 (off shore bar) 的砂層よりなり、西から東に向って成長した一種の分枝砂嘴である。その最高位の海面は現在より約五m以下高かったと推定される。この砂嘴は西端部で海風に抜がっていたものと考えられる。この砂丘本体の海側にあった浜地状のかすかな高まりに防風が築かれたため、風成砂が吹きよせられて現在の浜堤状砂丘を形成し、砂丘本体上の風成砂は極く薄い。砂丘北端の海蝕崖に露われている砂層には整理が秀逸しているが、風成砂に比べ粒が粗く、現在の浜の砂層に似ている。この兩者は重鉱物含量、不透明鉱物の割合とも風成砂に比べて著しく多い。

今津砂丘の東端部は前述して来た新砂丘に比べて高く、北に向う傾斜を示している。この部分の断面は砂取場の崖面で見られる。ここでは上から、整理をもつ風成砂層 (約二m)、塩分の固結したような薄いパッチ状整理をもつ暗色砂層 (約六〇cm)、中粒砂層 (約六〇cm)、暗色砂層 (約三〇cm)、整理をもつ中粒砂層 (約三m以上) の順に重なっている。上位の暗色砂層には須恵器や土器の破片が含まれている。下位の暗色砂層は泥を多く含む褐色ローム質砂に移化する。砂取場の東方、野の花学園のゴミ捨場では、約一mの風成砂層の下に有機物に富む黒色ローム (約二〇cm)、褐色ローム (下段露出せず) が見られる。従ってこの部分の砂丘砂層は二枚の暗色帯またはローム層によって三分される。下部は褐色ローム以前に形成され、褐色ローム堆積期には少くとも一部陸上にあった。中部は褐色ローム後、古墳文化以前、上部は古墳文化以後の風成砂である。最後の風成砂は昆沙門山の覆海抜約四〇mまで吹き上げられている。褐色ロームは明らかに下位の暗色砂層と同層であるが、黒色ロームは褐色ローム上部の有機物に富む部分であるか、上位の暗色砂層に当るものであるかは現在の資料では決定できない。

(3) 今津砂丘周辺の地形面

前述したように今津砂丘の本体は、海面が現在より約5m以下高い時期に形成されたもので、この時期の面をI1面とする。それに対して、今津砂丘の南側に広がる低地は、人工的干拓によるものがかなりであろうが、現在の海面に従って形成されている。この面をI2面とする。I1面とI2面の間に一枚の地形面が認められる。これをI1a面とする。I1a面はその高さから判断して現在より3m以下高い海面に従って形成されたものであり、I1a面を切り、I2面に切り入れられる。今津砂丘本体の平坦面のうち3m以下の部分は、あるいはこの時期のものを含むかも知れない。この面の上には弥生文化前期初頭の長浜貝塚がある。以上三つの面は沖積面と呼ばれているものである。

I1及びI1a面はI2面によって埋積された丘陵や山地の麓に残存して一種の段丘面を作るとともに、丘陵や山地を刻む谷底にも延びて一種の河床段丘面をなす。これらの谷底には沖積面より一段高い段丘面があり、これをII面とする。その代表的なものは大原部落南西にあるもので、末端で海拔5mの高さを示す。この段丘は薄い礫層よりなり、風化して著しい褐色を呈しており、ローム層でおおわれていない。この面は末端ではI1面に切られた段丘面であるが、谷底では谷底面を作っている。この傾斜はI1、I1a、I2面の間にも認められる。更にII面より高い位置に三つの面が認められる。これらをIII、IV面としておく。これらは海面が順次、継続的に低下しつつある時期に形成されたものであろう。

(4) 対 比

山崎(一九五五)は北九州の文化遺跡の分布から、縄文期、弥生期の海岸線が夫々現在の標高一〇m及び5mの位置にあったことを推定し、さらに、縄文期以後現在に亘りにつれて遺跡の標高が低下する事実を指摘した(山崎、一九五七)。

浦田(一九六二)は福岡平野の現沖積面より古い低位平野面をI₁、I₂、I₃の三面に区分した。それによれば、I₁面は其層の露出した(一部礫層を伴う)丘陵の頂面である。I₂面を作る堆積物は上部・下部に二分され、礫層・砂層、礫石火山灰層よりなる下部層の上に不整合関係で上部を構成する礫層・砂層、火山灰層が乗る。最上位の火山灰層は著しく粘土化し、角閃石を含む。I₃面は礫層よりなる沖積段丘面である。

野原・他(一九六四)は北九州の第四系について幾つかの指摘を行った。それによると、(1) 中位段丘は上位・下位の二面に区分される。七位面は熊本県大洲町付近にある海棲貝化石を含む長洲層の堆積面で、関東地方の下末吉面に対比される。下位面は八女粘土、鳥栖ローム、阿蘇新期熔岩を伴うもので、武蔵野面に対比される。低位段丘には褐色ロームを伴わない立川面に対比される。(2) 北九州市若松付近で首藤(一九六二)により鳥栖層とされたものの下底に鳥栖ロームがあり、それ以下の岩盤層上部の砂層を古砂丘、鳥栖層をおおう砂丘を新砂丘とする。鳥栖

層は中程にある暗色帯によって上部・下部に分けられ、上部は立川ロームに、下部は立川礫層に当る。

以上の資料と今回の調査結果を対比すると、次のように要約されるであろう。

- (1) 今津の古砂丘は低位設丘上位面に對比される。
- (2) II面は低位設丘下位面に当る。今津付近のII面は礫層のみで構成されているが、瑞穂寺川上流のII面の礫層は角閃石に富む白色火山灰レズを含んでいる。

(3) 今津の新砂丘本体（I—II面）は縄文海進の最盛期に対応する。

(4) 弥生海退に停まって砂丘本体は徐々に水面上にあらわれた。この期にI—II面が作られる小停滞があった。

(5) その後いくらか海面が上昇している。

(6) 元寇防塁築造その後浜堤新砂丘が形成された。

引用文献は本報告で詳述する。

(波藤 尚 (文京区子田))

五 今津・生の松原防塁の土木工学的考察

1 今津防塁の砂の性質

防塁築造について何らかの工学的特徴を見出す意図をもって、今津地区の防塁について、その砂の工学的性質を調べた。砂試料の採取箇所はTable 5のとおりである。それらの粒度曲線、名称区分、粒子の比重の試験結果はTable 6に示すとおりである。

一区および三区の砂は、ごく粒径が均等し、 $0.2 \sim 0.4$ mmの範囲に収まるのに対して、四区のものには細粒分を多く含むだけでなく（粘土分七割）、最大粒径も $5 \sim 10$ mm程度になっている。この四区のような土は工学的に安定な理想的築堤材料であるが、おそらくその意図を持って用いられたものではなく、ただそれぞれの地区の現地の地盤土を利用した結果にすぎないと思われる。

砂の比重は、三区のものに比べて一区と四区の方が大きい。四区の方が大きいのは粘土分の影響であるが、一区のものが大きいのはその化学的成分の相違に起因するものと判断される。

今津地区の防塁は現在の汀線からかなり離れたところにあるだけでなく、海水面との標高差も大きく元寇当時と地形の変化が著しいので、構

築造時の地形を推定することは意義のあることと考える。当時の地形は、砂の紋痕などを海岸線と横断方向だけでなく、深さ方向にも調べて判断できる見込みがあり、四十四年度に実施する計画である。

2 防壁に対する雨水および地下水の影響

前年度発掘された左の松原の防壁は水際位置に位置し、しかも地形的にも傾斜地上にあるので、その保存について懸念される点が多い。保存上の要点は、(一)基礎が何らの処理を加えない砂地盤にすぎないこと、(二)築石、しかも乱積みである築石の口地もまた、何らの処理を施さない砂であること、(三)築石が砂壁の前面と上面(天端)を被覆した形式になっているにすぎないこと、とくに上面の敷石は不完全なものであること、である。

このような構造の堤体の損傷ないし崩壊の原因として考えられるのは、(一)水飽によって堤前面の基礎砂が浸食し、それによって起る石積の不安定化、とくに陥没的崩壊、(二)雨水や波しぶきによる水蝕はもちろん、風蝕による目地砂の脱落、それに伴う石積の不安定化、とくに上部から起きやすい石の崩落とである。

しかし、地下水位は著しく深いところにあることが分っており、このため、さいわいにして、斜面上に平行的な地下水による水蝕やパイピング現象は考えられない。昭和四十三年九月二十四日、十六号台風(降雨量百ミリ程度)のさ中に強地で行った調査から(四)が得られており、連続の降雨のちでも地下水水位は築石の堤の高さからおおよそ二・五〇mの深さにある。したがって降雨による主な水の流れはすべて鉛直方向にしか起きない。

一方、今津地区の防壁は、石積が堤内部にわたって施されていて、堤自体かなり堅固であるだけでなく、地形平坦のところもあり、しかも標

Table 5 今津防壁の砂の採取箇所

Trench番号	採取番号	備 考
1区	-3 No. 1	堤の内 部
"	" No. 2	堤の 外
3区	-12 No. 3	天 端
"	-13 No. 4	杭 杭91の天端
"	-17 No. 5	" 杭92の "
"	-19 No. 6	" "の裏側10mの天端
4区	-2 No. 7	堤の内 部
"	" No. 8	堤の 外

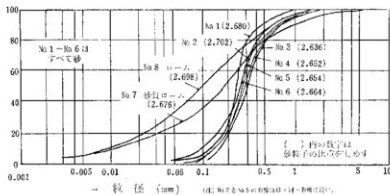


Fig. 4 今津防壁の砂の粒径と比高

Table 6 元寇防壁保存上の問題とその対策(生の松原、今津地区)

問題点	生の松原	今津	考えられる方法
(1) 築物の礎に沿う砂堆積の安定	必要	不要	注入(薬液、セメント) 砂堆積的な間接的防護
(2) 天端明の湧水	必要	必要	スプレー(薬液など)
(3) 石積の目地(砂)の浸透防止	必要	必要	注入と目地詰め
(4) 風化のはげしい石の表面保護	必要	不要	スプレー(薬液)

- (一) コロイドセメントミルクによる注入剤
 (二) 珪酸ソーダ(水ガラス)またはアクリル酸塩を主剤とし、樹脂を顔料とする注入剤
 (三) エポキシ樹脂系のスプレー剤と目地詰用の砂の間詰め剤

長期にわたって露出した状態で保存するうえで、生の松原地区と今津地区とで弱点が相違するので、工学的保存の方法は対象を分けて考える必要がある。
 スプレー、目地詰めといづれでも、薬液のうちでもっとも接着力の大きいものはエポキシ樹脂系のものであるが、コストが高いことが難点になる。種々関係者とも検討した結果、四十四年二月から三月にわたって、生の松原地区で試験的に使用されることになった材料は次のようなものである。

3 防壁の保存方法

高も高く、地下水の作用は全く考えられない。問題は石積の目地砂の脱落による上部の石の崩落防止、掘削され大堤と反対側の砂の斜面の砂防だけである。

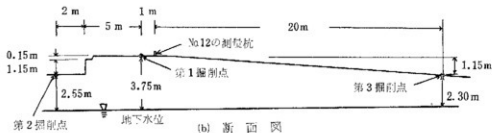
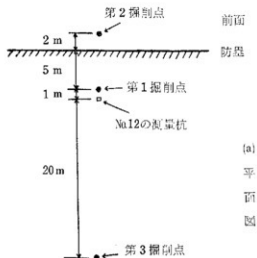


Fig. 5 生の松原防壁の平面および断面図

このほか、コンクリート打ちによる礫石の斜治いの防護も試験されるが、この方法は技術的に特別の検討を要しないと考える。この方法は外観上理想的ではない。

この試験施工は四十四年三月までに予定どおり行われ、その結果はほぼ成功したと考えられるが、その耐久性については今後の観測に待たねばならない。

なお、この調査には九大工学部技術員森殿氏の協力を得て行ったことを付記するものである。

(九州大学工学部 山内研究室)

六 文献からみた今津元寇防塁

1 今津地区防塁の築造負担国

近衛家本追加(弘安七年、八年十一月)に

一 大隅口向西國役所今津後浜等

先度除之、為要害云々、如元誓固、

とあって、大隅・口向の二カ国が今津後浜を誓固する定めであったことがわかる。誓固番役は石築地役と一致するから、大隅・口向の防國は、ともに今津地区を防禦築造負担区域としたのである。では、兩國の領主たちは、今津の東西を、東側は大隅、西側は日向という具合にそれぞれ國ごとに二分して石築地役を分担したのか、兩國を東西に分けることなく混みで今津一帯の防塁を造成したものか、といったこまかな点になると、まったくわからない。

今津地区防塁の正確な直接史料は大隅関係のものしか残存しておらず、日向國の分の防塁関係史料は絶無であり、広義の元寇関係史料が一、二残存しているにすぎない。

2 今津地区防塁築造の実態

今津地区の防塁築造の史料としては、『薩藩旧記』雑録前編卷七所収調所右恒伝所載の延治二年(一二七六)八月日石築地役免許案がある。これは単に今津地区だけに限らず防塁一般の築造に関する諸原則を示す史料として貴重であり、すでに相田二郎氏によって詳細な分析が試みら

れている（『蒙古襲来の研究』二〇八一—二〇八二頁）。以下、同研究を参照しながら、大隅および日向両国が負担した令津地区防塁築造の実態について述べてみよう。本史料の記載は、内容上から次の四部にわかれる。

(1) 本史料は、元寇によって大隅国に石築地役が賦課され、若恒は測所職として大介兼税所某等とともに石築地役を同国内に割りあてたことを示すものである。

(2) まず、小河院内の地名とそのおのの田数を記し、以下、曾於郡・桑東郷・桑西郷内の地名とその田数をあげている。これらの田数にたいしては、次の(3)のような石築地役の割合を記していない。相田氏がいわれるように、課役が免除されていたのかもしれない。

(3) 前の桑西郷記載の次に、郷工所給田三三五反と記し、その下に三尺五寸と記し、さらにその下には次助寺上座と記している。これは、郷工所給田三三五反が弥勒寺上座の所領で、その負担すべき石築地役が三尺五寸という意味である。石築地役の負担の割合は段別一寸となる。以下の記載はすべて同一様式で、負担の割合は、中には若干相違するものもあるが、ほとんど段別一寸である。田数をあげて課役の長さが書いてないのがあるが、これは課役を免除されたものであろうか。本史料にもともと本文であるから、写しおとしということも考えられる。

(4) 最後に、この石築地役は關東御教書と少式経賢の施行にもついたものであり、建治二年八月中に遊成させるべきであることを書き、石築地役配分の直接伝達者の署名がある。その最初にみえる測所藤原というのは測所所領であり、以下、青生藤原・兼官大藏・大介兼税所藤原・守護代左衛門尉藤原となっている。これは、國衛の測所・青生・兼官・大介兼税所と海防側の守護代との二重の要員から成っている。石築地役が一國平均の課役として太宰府の武家側支配者たる少式氏および大隅頭衛を通じて、大隅国内に課せられたことを示している。元寇の国制史に占める意義を示す一指標である。

本史料と現存する防塁とを照合して、どのようなことが判明するのか、ということが実はさしあたり重要であるが、本史料もこの点になるとあまり効力がない。相田氏は(3)の部分から大隅に賦課された石築地の長さを三五九間余（二一、五七〇寸余）と計上している（二一九頁）。同氏は、大隅国の総田数を拾芥抄に準拠して四、七七〇町とし、段別一寸の割合でこの総田数に賦課すべき石築地の長さを七九五間と算出している。ちなみに、拾芥抄は永仁二年（二一九四）以前にできており、洞院公賢が抄録したという。大隅と共同して令津地区の石築地役を負うた日向の關係史料が地無なので、相田氏は、大隅における総田数と実際の賦課との割合から日向の場合を推定している。

拾芥抄によって日向一國の負担すべき石築地の長さは一、三八三間余であるから、大隅の場合から判断して、実際に賦課されたのは六二二間余になると推定している。こうして、大隅と日向との両国が実際に負担した防塁の長さを九八二間と算定。相田氏は木下讚太郎氏の調査（『元

寔史蹟の「新研究」所収)によって今津の現存する防塁の長さを一五町とし、間敷に換算して一、五〇〇間とし、實際賦課九八二間との差違の大きさに驚いている。しかし、大正十一年の調査では、防塁の長さは二八町(一、六八〇間)であり、現在でも、ほぼこの長さが残っている。その差はさうに大きくなる。

相田氏のように、かりに繪芥抄に準拠すれば、大隅は日向にたいして三七パーセントの負担比率になる。かりにこの比率が何程か信用できるとすれば、大隅・日向のいずれか一方の国の分征地域が、東側か西側か判明すれば、全道跡約三キロの三七パーセントの部分が大隅の負担部分であったということになる。

3 今津地区の警固番役

大隅・日向両面の領主たちが、今津地区に、具体的にはどのような防塁を築造したのか、を知りたいのであるが、日向は関係史料をまったく欠き、大隅は前述の史料を除き警固番役関係史料しか残していない。警固番役は石築地役に等置されるという観点から、関係史料を残す大隅の領主たちの警固番役勤仕の事実を整理し、今津地区石築地役負担の実態をも推測する支証としよう。

大隅国御家人異国警固番役勤仕事例

勤仕の御家人	勤仕の期間	勤仕の場所	出
1 佐多弥九郎定親	弘安五年九月、十五日 弘安六年六月一日(八月朔日) (九十日)内除沙(石五分)定五(十四日)	今津	(平次は、福地氏による、皇朝御勤史第一巻第一八頁(享和未詳)す) 福地氏所居文書(弘安五年十一月四日)大隅守藤千太郎(警固番役勤仕状)
2	〃	今津	右同弘安六年十月、十一日大隅守藤千太郎(警固番役勤仕状)
3	〃	今津	弘安七年五月十二日
4	〃	今津	弘安九年二月二十一日(唯弘安九年)
5 佐多弥九郎定親	九十年(内五十四日) (残り数は九郎(定親)〃)	今津	弘安九年八月(前日大隅守藤千太郎(警固番役勤仕状)

6	佐多 定 規	正徳元年四月	—	—	正徳元年八月一日
7	佐多定規代官 池部 了 經	正徳四年六月一日—同八月晦日	—	—	正徳四年九月三日
8	伊佐波阿志次郎代 二宮 一 郎	—	—	今津 義 浜	—
9	佐多阿三(古)三郎	—	—	—	永仁二年八月一日大隅守兼北条時貞警固番役勤状
10	—	—	—	—	永仁四年九月七日(佐多) 定規警固番役勤状
11	佐多歌九郎(頼親)代 兵衛四郎忠助	—	—	—	永仁五年八月四日大隅守兼北条時貞警固番役勤状
12	—	—	—	—	正安二年後七月二十六日
13	—	—	—	—	正安二年七月二十五日
14	佐多 孫次郎信規	嘉元三年四月	—	—	嘉元二年後十二月二十九日為國警固番役勤状(公当は大隅守兼代)

このたぐいの表は、すでに相田二郎氏『蒙古襲来の研究』(二五五—一五六頁)や『鹿兒島史』第一卷四一八頁によって整理掲出されている。筆者が前二者以外に新たに発見し得たことは、最初の番例(一)を、前二者ともに年未詳としていたのを、原本をみることによって、端裏書から弘安五年のものと判定したことぐらいである。今回は文書名を完名でかかげ、前二者の整理を補った。これによって、大隅の御家人は、いづれも今津後浜において、おおむね三カ月在番するのが原則であったことが知られる。臈前の一カ月あて勤仕の事例にくらべると、三カ月というのは重い負担であったようにみえるが、臈・朔・日の三カ日は遠国であるから、交通の点、それにとまらぬ縮負担のことなどから、同一年内にまとめて三カ月勤仕したものであろう。

大隅の警固番役、すなわち石築地造成の指揮統轄は、岡田守護が行った。これは前表に示したように、番役の勤務完了証明書、いわゆる覆勤状の残存によって明らかられる。表では、1から7までの弘安五年から正徳四年まで、千葉宗胤が大隅守護である。千葉氏は下総を本拠とする

大雄族で、元寇を機として肥前で在地領土化する。8以下は北条氏一門の北条時直である。佐藤進一氏は、時直が大隅守護としてあらわれるのを、赤松文書四によって永仁三年八月二日からとされたが（『鎌倉幕府守護制度の研究』一七四頁）、これは、その原本である坂口忠智氏所蔵文書によって（前表所載）、永仁二年八月二日であることが判明する。大隅守護の千葉氏から北条氏一門への交代は、元寇を機とする北条氏の守護職占取の事態を示すものである。

太宰府神社文書弘安七年三月十一日安楽寺留守法橋あて少式経資書状によると、千葉氏は今津に地頭職をもっていたことが知られる。同文書によれば、安楽寺留守所は、今津地頭千葉太郎（宗胤であろう）の代官が吉祥院御八幡米勝殿船具等を押し取ることを少式経資に訴え、経資は千葉宗胤に船具等の返却を命じている。千葉氏は、次にいうように、大隅守護として大隅國の負担であった今津地区の防禦造成を監督するため、その守護領として今津に地頭職を所有していたと考えられる。

島津家文書貞治二年四月の島津氏所領法文に、大隅國守護職并守護領として「筑前國今津村同守護領」があり、今津村は同年四月十日、貞久から氏久に譲られている。島津貞久は建武政権下で大隅守護に補任され、足利尊氏の隕反後も、室町幕府から大隅守護を認められていたのである。大隅守護であった千葉氏が今津に地頭職をもっていたのは、この事例から推認して、守護領であったとみられる。また、島津氏の今津領有も、大隅守護千葉氏およびそのあとの大隅守護北条氏を経て、大隅守護の守護領として領有していたものと考えられる公算が大きい。

4 日向の元寇関係史料

宮崎県立博物館には松平家本の蒙古襲来絵詞があることは知られているが、文獻の方では、県内外をとわず、日向関係の確かな元寇史料は皆無の状態に等しい。今津地区防塁が大隅・日向の共同負担であり、大隅の方は史料的に成る程度めぐまれているのに、日向の方は、広義の元寇史料にさえめぐまれない状態である。現在知り得る限りで、日向の元寇関係事項を、「文獻からみた今津元寇防塁」という主題に迫る基礎作業の一つとしておきたい。

(1)『日向国史』上巻六三二頁は日向記によって、元寇と伊東氏との関係について「文永十一年、彼の元寇の変あるや、祐頼（伊東氏二代祐光の代官として日向を管す、のち伊東氏三代となる一川添一）諸将士と共に之に赴き、軍功あり」と述べている。伊東氏は伊豆国工藤氏が同国伊藤を領していたところから、伊藤（東）を名乗ったもので、東国御家人として九州に土着したものである。『日向国史』は建久元年正月、祐経が日向に地頭職を得たとして（上巻六二五頁）、岡田帳にみえる臼杵郡内泉庄百三十四田島庄九十丁の「地頭致齋藤原左衛門尉不知名」を伊東

祐時にあて(六〇五頁)ているが、同人が伊東氏であるという確証はない。これは『日向記』所収伊東文書建久元年正月二十六日江藤祐経あて源頼朝の日向国地頭職宛行下文を下敷きにしたものと思われる。なお、同記は建久元年六月二十九日の同内容の頼朝下文を収めているが、はたして信賴できるものかどうか疑問である。

大光寺文書には永仁六年十月二十八日伊東祐教宛券があつて(『日向古文書集成』三一頁)、これ以前に伊東氏が日向国内に所領を有していたことは確実である。相良家文書正和二年八月丙日鎮西下知状には伊藤藤内左衛門尉祐広が使節公事をはたしていたことが見え、日向国内の在地御家人として活躍していたことが知られる。祐広は先の祐頼の子であり、祐頼は祐時の八男と伝え、薩摩庄内木嶋(或いは箱分)を本領として大勝殿と称されていたという(『日向記』)。祐頼が元寇の折九州に下向して合戦に参加したという『日向国史』の説は、或いはあたつていゝるかも知れないが、現存史料によつて、それを確かめることはむづかしい。

(2) 宮崎市旭通町郡司信介氏は郡司氏の系図を所載しておられ、その中に吉朝の子宣景について

弘安四年義賊藤末於肥前鹿嶋打死、在年廿三歳、仍頼功人数入有初沙汰所也
と伝えている(五味克夫氏「日向国郡司について」『歴史学』一三三三号参照)。所伝に信がおけるならば、弘安四年の肥前鹿嶋の殺敵楊藏歌に一史料を加えるわけであり、日向の武士が元寇合戦に参加したことを示す貴重な(或いは唯一の)史料となる。郡司氏は日向に繁延した豪族日向部氏の一族で、実を祖とする。郡司系図によれば、宣景は実盛の弟吉盛の系譜をひく。

(3) 日向国の元寇「國供」の確かな史料としては、『日向国史』上巻六二一—六二二頁所引の島津文書正安三年十二月二十四日関東寄進状だけである。同文書は尾藤左衛門尉時頼の所領日向国曰若郡田貫田を異国降伏のために正八幡宮に寄進したものである(同日付の関東寄進状が島津文書にもある)。これとても元寇そのものの直接史料ではなく、元寇を機とする戦後の国内緊張を示すいわば間接史料である。尾藤時頼は『日向国史』がいうように土持氏ではなく、北条氏理内人(得宗被官)の尾藤氏であろう。尊卑分限の藤原秀郷流が伝える景頼の子時景は時頼を改めたものであるから、この尾藤時景にあたるのではあるまいか。

知景—景頼—景氏

景頼—時景
景連—頼定
頼広—頼氏
実綱—満屋

ちなみに、九州には御内人尾藤氏の所領として、尾藤六郎左衛門尉の所領が筑前國嘉麻郡下山田四十町としてあり（福良家文書貞和六年十月二十五日足利直冬安堵状）、同人は右兵衛中六郎左衛門頼氏にあたるのではないかと考えられる。

ともあれ、日向関係の元寇関係史料は以上の三例しか発見し入らなかつた。将来、今津地区の防塁（或いは築園番役）関係の史料が発見されることを切に願つて報告の筆をおく。

（川添四二）

七 所謂「蒙古礎石」の発見

——志賀島、唐泊の新例——

博多湾海中より中央に神船のある扁平方柱状の石材が発見されることがあり、古くから「蒙古礎」などとよばれていた。明治二十四年刊行された山田安栄の名著『伏波編』巻ノ四に「蒙古礎図」をあげ、厚岡市博多中島町服部太三郎（旅亭京屋ト号ス）口説ならびに社家町鶴田神社の域中にあるものを紹介している。

昭和年代に入って内務省の博多湾修築工事中に、バケツト浚渫船によって礎石が海中より突露に発見された。昭和六年より八年に至る間に五個、その後、昭和十五年に一個発見され、現在箱崎八幡宮などに所蔵されていることは別表に記すとおりである。

昭和十六年、川上市太郎氏は「元寇発見」地之巻を刊行し、これらの資料をまとめて「蒙古軍船礎石」としてのべている。昭和初年代の博多湾海中発見のもの外、すでに古くから福岡市内に所蔵されているもの十二例、肥前東松浦沿岸海中より引揚げたもの三例、彦成の発見例二例を紹介した。これらに凝灰岩、花崗岩、石英斑岩よりなり、朝鮮半島南部の當時の港にちかいところで石材がきり出され、この石に木枠をとりつけ礎石にしたもので、文永の役に蒙古軍船の使用したものと想定されたのである。

2

昭和初年の礎石の発見地点は、現在、博多港の中央埠頭のトになつてしまつたが、中世の博多の地形からみると所蔵、袖の浜の港門より約九

町より十町はなれた地点になる。ところが、戦後、福岡市の沖合にある志賀島の東西部中で、また昭和四十三年、唐泊の砂浜より発見され、博多湾にひろく埋没していることが明らかになった。喜政や東松浦半島にもあることはすでに報告されているが、近年、長崎県五島の小嶺野島発見のものも、現地では「唐船使船の礎石」と称しているものであるが、これも同類のものである。いま近出の博多湾の資料を紹介してみよう。

1 福岡県志賀郡志賀島町蒙古塚沖合

「漢委奴国王」印発見記念碑の東北に蒙古塚がある。昭和三十六年この蒙古塚の東南一〇〇mの海中を、坂付駐在の米軍人がダイビングしていたところ発見したもので、現在、福岡市兵庫町の日本航空支店に保管されている。二個とも高灰質砂岩製の小形品である。一個は九八・〇cm、二七・〇cmをはかり、他の一個は八八・〇cm、二一・〇cmをはかる。

2 福岡市宮の浦、唐泊、小フケ、後浜海岸

昭和四十三年十一月、唐泊漁業協同組合員、寺田文七、柴田良一、板谷千造氏が、後浜海岸の波打際に礎石一個のみえかくれしているのを発見した。後浜海岸の沖合には、水深六mの地点にさらに一個埋まっていることが確認されたという。後浜海岸発見品は、石英凝岩、長さ二・二四m、二二七・〇cmをはかり中央に棒帯のある典型的なもので、現在、福岡市中央公民館に保存されている。

3

福岡市唐泊発見の礎石は長さが二・二四mである。これに近い長さを有するものは別表番号の(2)二・二二m、節二・一八m、(4)二・二六m、(5)二・一七mなどがあり、中国の宋尺(一尺二二・六cm)になおすと、約七尺にあたる。形は角柱形、中央があつく両端がややせまくなり、全体の中央部にあたるところに、広面に広く浅い帯状に、狭面には狭く深い溝状にほりくぼんでいる。川上市太郎氏は前者を「棒帯」、後者を「楔溝」と名づけ、この礎石に木枠をつけ、「楔溝」のところを木楔でとめたとして、二形式の復元図をあげている。

この「蒙古礎石」とよばれるものが、その形状や海中から発見されることなどから考えて「礎石」と推定されていたことは前に述べた通りであるが、鎌倉時代の作品である「蒙古襲来絵詞」中の蒙古軍船に、同形の礎石のかかれていますことをたしかめることができる。この絵巻は肥後の御家人、竹崎季長が文永・弘安の役二度の合戦における殊勲をたてた経緯を絵巻に画かせたもので、長く天草の大穴野家に任わり、現在は御物となっている。絵巻はすでに錯簡、逸脱した部分があり、二度の役の経緯をあわせ考えながら整理する必要がある。

いま「日本絵巻物全集」(角川版)の「蒙古襲来絵詞」によるとPageの「季長及び大穴野家の責職」(VI)、Pageの「戦船」(VII)、「筑

船の防敵」(VII)、『L』の「蘇船中の敵船」(IX)に「蒙古軍船」が描かれている。このうち大形船六隻、小形二隻がみとめられる。大形船は、その後が高くなり、後部は滿状になっている。両側に窓があるのは、水手が船を漕ぐためのものである。帆、帆柱の形状がくわしくつぎつぎと異なるが、船の形式は、明、胡宗憲(鄭若質)の著した『籌海図志』中にみえる新会県、東莞縣などの大船(海賊船)の図とはほぼ一致している。「沈中」の敵船一(IX)の一隻の船首にはあきらかに木枠でとめた碇石があり、碇で、前部の棹にとめていることがわかる。VI、VIIの大船の船首には車輪がある。これは碇石を巻揚げるものである。

文永の役にあたり、元は至元十一年(一二七四年)高麗に大船三百艘、快速船(拔都魯艦疾舟)三百艘、淡水小形三百艘計九百艘を遣るべきを命じ、このため高麗は半年の間これを完成し、また將兵八千、梢工(操舵手)、水手六千八百人を用派せざるを得なかった。弘安の役では高麗の負担した戦船九百艘、將兵一万人、水手一万五千人を数え、これは「東原軍」中に編成された。この際、元の皇帝フビライは新しく元臣降った南宋治下の四州である揚州、瀟州、湖南、泉州に戦船四百艘の建造を命じ、宋の降将、范文虎に日本征討を命じたのである。范文虎は大都(北京)に至り、フビライの詢問に答えたがその中に、戦船を、古い戦船のなかから使用に堪えるものを選び出すべきを建議して書かれている。山口修氏はこの古い戦船を宋の時代造られた戦船と解釈されたが従うべきであろう。この四百艘が江南軍船に編入され、その主力となったことは想像できる。

宋代の船舶のことについては北宋の曾公亮『武經總要』、尖威の『漳州再談』や北宋の宣和五年(一二二三年)高麗に使し、報告を記した徐銳の『高麗図経』、南宋の呉自牧『夢粱錄』などに記載がある。これによると船舶の大きなものは数百人、小さなもので百余人をのせ、舟師が夜は帆、昼は口、くらやみの時に指南針(羅針盤)を用いて航海したことがわかる。

この中でことに注意されるのは北宋、徐鋭の『高麗図経』巻三十四、客舟の記事である。北宋の朝廷が高麗に使を遣す際には、福建、西浙監司に委嘱して客舟を募集し、明州(浙江省寧波)で裝飾させたことがみえる。この舟は長さ十丈余(三〇m余)、深さ三丈(九・五m)、幅二丈五尺(七・九m)をほかり、二千斛の粟をのせる。木造船で、上は平たく、下は尖つて波を切つて進むことができた。全体を三分して前の一介に櫂、水櫃、その下に兵甲宿棚があり、中央の一介は四室をつくり、後の一室は厩屋とよばれ、高さ一文余、隙があり、あたかも家のようにあった。船首には両柱中に車輪(嚙輪)があり、蘆葉をまく。これに訂石をつける。石の両夾に二本鉤をもつてはさんでいるとのべている。

この客舟(客船)は、宋代の代表的な船舶の一例で、これで宋と高麗との交渉が行われた。この形式は先にのべた『蒙古襲来絵詞』中の大船と一致しており、碇石や巻揚用の車輪のあること、宋代では江南において造船技術が進歩していたことなどがわかるのである。

蒙古襲来に際し、元の江南軍の船舶が、江南で製作されたことはいうまでもないが、高麗で製作された大船も広い海洋をわたる宋元代の江南の大船の制度をおそったこととはみとめてよいであろう。

明末、書かれた宋応星の『天工開物』（戴内清訳、平凡社版）には舟車の製作に對する一項がある。碇石は鉄鑄になっており、一隻の樺船には總計五、六個の碇を用い、その最も大きいものは重さ五百斤（三〇〇kg）をはかるといっている。

文献からみて宋代、少くも元代にまで海船大船も碇石を用いていることがわかるが、明末には鉄鑄になっている。これは元明代に鉄の生産が飛躍的に伸びたことも一つの理由だと考えることができよう。

以上のべて来た大陸側の船舶に対して日本側から大陸にわたつた舟についてみると、古代では遣唐使の船がある。初期には周防国、中期では、近江、丹波、播磨、備中、後期にはおおむね安芸国に課して造らされたが、一隻百二十二人より百六十人位がのつた。この遣唐船が東支那海を渡るに半月より一月を要し、また暴風にあつて遭難したことはしばしばであり、宋、元代、日本からの渡航した僧侶などはほとんど博多などに入港した宋、元船を利用したのである。遣唐船や室町時代以前の船の形式についてはいまだ充分に明らかでないが、南支那海とともにも急激に発達した中国江南の海船にくらべて、平底式で耐波性がよく、機能的にもおくれをとっていたことは率直に認めなければならぬであろう。ことに一mより二mにわたる碇石をつけた大船が、平安より鎌倉時代に相当数あったかどうかは疑問というはかはないのである。『蒙古襲来絵詞』では、小舟にうちのつて大船にたちむかうわが国の将兵の姿が描かれており、彼等の船舶の大小、相違はあまりに明瞭であつたのである。

近年、発見された所謂「蒙古碇石」、ここに志賀島や唐泊の例を紹介して、これらの碇石が「蒙古襲来絵詞」に実際に描かれていること、また宋代の文献にみる海船に碇石、機軸が存在したことをあげてみた。現在博多湾その他から発見された碇石は三十例をこえ、この分布はほぼ蒙古襲来の高麗（東路）、江南軍の航路とは一致している。碇石は軍船のみならず、当時博多に來航した商船にもあつたであろうから、このすべてを蒙古襲来時のものとするにはできないが、博多湾にこのように多数埋没していることによつて、この多くが蒙古襲来時のものとする公算のきわめて高いものだといふことができる。この碇石が実際に何処で製作されたものであるか、今後問題はのこるのであるが、現在考えられるところを整理し報告しておきたいと思ふ。

八、おわりに

今次の調査は今津地区を主としておこなわれ、その各地区で発掘調査を行い、幸いきわめて重要な成果をおさめることができた。

1 今津地区の元寇防塁は、東は毘沙門山、西は柑子岳の間にある砂丘に、約三キロにわたつて連続して構築されている。

2 西の柑子岳山麓に接する部分には明らかでないが、東の毘沙門山に接する部分は、この度の調査で明らかにすることができた。山丘の傾斜を鈍右状にふいており、この地域の字名が「門戸口」、「戸口」と称することも、ここが出入口をなしていたことを想定せしめるものがある。

3 防塁は、上面(天)が完全にのこつているものが少いが、Ⅱ区—5では、高さ二・八三mをはかり、約三mの高さのものがあり、底山幅は最大四・三〇m、最小二・七〇m、上面(天)幅最大二・六〇m、最小一・九四mをはかる。傾斜度は前面七六—八六度、後面七〇度—八〇度、Ⅱ区—6区は生の松原地区とおなじく後面は砂丘を利用し、礫石をおいている。

4 防塁は前面が後面より急な傾斜をした台形である。前面、後面、内郭もともに石の上に石をつみ、大部の石と石の間隙には砂をいれ、粘土は用いられていない。また石材は割石、または自然石で特に研削のための加工はほとんどみられない。

5 石材は花崗岩類(Granites)、変成岩類(Metamorphic rocks)、玄武岩類(Basalts)が大部分をしめ、一部、砂岩(Sandstones)、灰岩(Porphyrtes)をまじえる。全般的にみて、今津防塁の西半分は花崗岩類が多く、東半分は変成岩類、玄武岩類が多い。今後さらに精密な検討を必要とするが東の毘沙門山では変成岩類、玄武岩類を出し、西の津舟峠には花崗岩類を出すので、石材の多くは砂丘の両側のこの地点にもとめたものである。これらの石材の中にはカキ、オオヘビガイなどの附着しているものが、少なからずみとめられ、海岸にある標石を利用したことものであることが想定される。「石築地(防塁)」の課役は三月にはじまり、八月末におわることになっている。春夏の時期、水中にとびこんで石をとり、獲ではこんだことが想像されるのである。

6 原則的にいえば、東半部に変成岩類、玄武岩類、西半部に花崗岩類の多いのであるが、各地区を更にくわしくみると西半部のⅡ区—1のように花崗岩、変成岩がほぼ量のひとしいところがあり、東半部Ⅲ区—20のように、花崗岩類が変成岩類の約二倍にちかい個所がある(T. 16. 1)。調査坑系五〇より五七三の間では西より玄武岩(二二・二m)、花崗岩(三七・五m)、玄武岩(四〇・〇m)、花崗岩(一八・三m

）、玄武岩（二五・一m）、花崗岩（八・〇m）、玄武岩（二二五・七m）、花崗岩（四四・六m）、玄武岩（三二・四m）、花崗岩（一・〇・一m）が交互にくりかえされているのは注目すべき現象である。（Table 2）

7 古文獻によれば、大隅、日向の二方面が今津後浜を警固する定めであり、警固番役は石築堀役と一致するので、この二国が今津地区の防禦を負担したことがわかる。『薩藩日記』雜錄前編卷七には測所佐恒伝ふるところの建治二年（一二七六）八月日石築地役配符案を収めている。福田二郎氏のいうように拾芥砂に準拠すれば、大隅は日向に対して三七パーセントの負担比率になる。また大隅国内の負担者の名称を記し、石築地役の割合が段（反）別一寸であることがわかる。

先にのべた花崗岩、玄武岩を交互にくりかえし、またその長さに差のあるのは、それぞれ負担者の区域を明らかにしているものと考えられるのである。

8 生の松原地区では、九次分院裏の防禦のほぼ中央より石材は東へ砂岩、西へペグマタイトにはばわかれていた。この地区を境にして東は肥前、西は肥後の負担によって築造され、警固番役にあたったとする可能性がよい。今津地区の日向、大隅の分根はどちらが東であったか、または混成して構築を行ったかいまのところ決定すべき材料がなく、今後の研究にまつことにしたい。

9 三郷に及ぶ防禦はほぼ台形のもの連続で、その間、望楼もしくは門戸らしきものを今のところみとめることができなかった。防禦に付属する將兵の住居址もいまのところ明確でないが、IV区—の南にある砂採取場では宋龍泉窯陶磁とともに中世の瓦器が多量に出土している。この瓦器は周防陶磁などの出土例から考えて鎌倉時代のものであることができるので、元寇前後の人々の生活、あるいは当時の將兵の生活を想定するにたる資料ということができよう。

10 建治二年（一二七六年）に防禦が構築され、弘安四年（一二八一年）に蒙古襲来をむかえたが、その後、鎌倉時代を通じて修補が行われ、室町時代になってもつづき、修理記事の下限は康永元年（一三四二年）である。この後しだいに忘れられ、しだいに砂中に埋れていったようである。防禦の前面には風成の砂層がたまり、さらにその上を覆い、自然の防砂堤をなすに至った。香椎、箱崎、博多部の防禦が全く失われてしまった現在、生の松原とともに、もっともよく保存せられた元寇防禦として歴史の遺産を眼のあたりあらわしているのである。

11 トレンチの大部分は再び埋戻したが、Ⅲ区—一二〇の一部は、そのまま保存されている。近年の急激な開発にともない、元寇防禦も随所で危険にさらされているが、市民各位の協力を得て、日本史のみならず、世界史上からみても重要なこの史跡の保存をねがうものである。

付表 1 今津砂丘の比重・粒径・鉱物組成

採取地	粒径分布特異係数				4φ-10φの鉱物組成 (換算)				実重量%				
	Mad	So	Sk	K	風化程度	高岭石	伊利石	蒙脱石		石英			
トノヅ野区-Oの南 (Loc.6)	2.62	0.44	1.32	0.97	0.28	6	5	83	2	1	2	2	17
現在の砂	2.60	0.44	1.27	0.94	0.28	11	7	74	2	2	2	2	18
トノヅ野区-O (Loc.3)													
1	2.65	0.44	1.51	1.07	0.30	13		75	4		3		7
2	2.63	0.40	1.42	0.96	0.30	7	1	85	2	2	1	1	6
3	2.65	0.29	1.18	1.02	0.22	8	1	85	3	3			5
4	2.62	0.30	1.20	0.97	0.23	6	6	89	2	2	1	1	2
5	2.65	0.36	1.66	1.33	0.29	3	1	86	4	2			3
6	0.63	1.99	0.77	0.32	0.75, 0.29								
7	1.12	1.41	0.80	0.22	0.75, 0.27								
8	0.64	1.95	0.89	0.23	0.96, 0.28								
9	0.49	1.39	1.12	0.24	0.96, 0.28								
10	0.48	1.43	0.97	0.26	0.96, 0.24								
長浜貝塚 (Loc.1)													
1	0.33	1.31	1.16	0.24									
2	0.28	1.25	1.14	0.21									
3	0.40	1.33	0.98	0.55									
4	0.57	1.41	0.81	0.29	0.36, 0.32								
野沙山古墳 Loc.7, 高さ30m	2.64	0.27	1.09	1.42	0.10	8	2	81	2	2	2	2	2
溝波より 1.5m	2.64	0.29	1.17	1.04	0.22	8	2	84	1	1	3	2	3
溝波砂層	2.64	0.31	1.26	1.14	0.22	15	1	76			3		6
4.5m													
今津砂取柄 (Loc.4)													
1	2.68	0.31	1.38	1.77	0.20	12	1	76	5	3	2	2	8
2	2.59	0.35	1.44	1.14	0.14	3	1	84	3	2	4	1	7
3	2.64	0.29	1.23	1.07	0.20	4	1	86	2	2	5	1	7
4	2.65	0.33	1.32	1.14	0.22	10	4	71	11	2	1	1	7
4' 特色ローム質砂						6	2	79	6	5	1	1	6
5	2.66	0.30	1.73	1.21	0.21	3	3	84	1	2	1	1	8

付表 2 中世今津年表

年 月 日	事 項	出 典
嘉應二(一一七〇)年 五月	仲原氏女、今津に齋願寺を建立することを発願す	齋願寺創建縁起
承安二(一二七二)年一〇月	仲原氏女、弥陀の末木を今津齋願寺に寄進す	"
承安二(一二七三)年 二月一八日	今津齋願寺仏像発願め	"
" 五月 二日	今津齋願寺仏像の発光に、仲原氏女・惣寛智阿権那の姓名を彫付く	"
" 五月一八日	今津に観音の仏像成る	"
承安四(一二七四)年 八月一四日	今津齋願寺発願め	"
安元二(一二七五)年一〇月三日	今津齋願寺大威供養、唐本大般若経六百巻開題	"
" 〇月二五日	榮成、今津齋願寺創建縁起一を草す	"
安元二(一二七〇)年 八月	この編以後、榮成、今津齋願寺大威供に仕す	蓋蘭益・鳥居縁起
安元二(一二七五)年 六月一五日	榮成、今津齋願寺僧房において、「敬時義助文」に奥書をす	同 勘文 奥書
(参考) 年月日未詳	宋の名表、今津に著す	源平盛衰記 卷十一
治承二(一一七六)年 七月一五日	榮成「今津齋願寺蓋蘭益・鳥居縁起」を草す	同 縁 起

	一〇月二五日	実録、今津地頭寺にて「法華經入菩薩淨土決」を著す	同書 八書
	寿永二（一一八三）年二月	案内、今津寺庫裏にて「在仁講法記」を再行す	同記 八書
	元暦二（一一八五）年二月二四日	案内、今津寺庫裏にて「規者略録」を再行す	同録 八書
	年月日未詳	慶承坊通規、大仏ならびに丈六仏像を修復す、中に鎮座今津一休あり	南無阿弥陀佛私集
	弘久三（一一九二）年二月	案内（か）、今津地頭寺にて「法華經疏」を訂定す	同経 八書
	嘉應二（一二二六）年九月五日	仁和寺僧入五助義三郎、家住の申請に任せ、怡土正頼寺今津宮に大仏が秘藏あり、堂内六町を預けり	大泉坊 文書
	文永八（一二七二）年九月九日	納長房、今津に知り、ただちに京都に入りて圖書を奉らんとす	五代書生物語、書生紀、書格記
	建永二（一二七六）年八月	「前六附曲を全損」として、今津地区の石築地造成せる	薩摩日記権録河内卷五
	弘安二（一二七八）年七月三日	仁和寺僧入慈一昌親三郎、怡土庄末代名内田港二万を全津地頭寺三尊堂塔に安置す	大泉坊 文書
	弘安五（一二八二）年二月四日	大隅守謙千葉宗康、大隅の御家人佐多定重の今津における異國寺同持役勅符の寫了を説す	坂口忠智氏所藏文書
	弘安六（一二八三）年二月三日	大隅守謙千葉宗康、大隅の御家人佐多定重の今津における同持役勅符の寫了を説す	〃
	弘安七（一二八四）年二月一日	安典寺僧了所、今津地頭寺千葉太郎の代官の吉住統八郎米崎藏船を御し、取ること、大津少貳萬石に納す	大宰府神社文書
	弘安七（一二八四）年五月二二日	大隅守謙千葉宗康、大隅の御家人佐多定重の今津後法における異國寺同持役勅符の寫了を説す	坂口忠智氏所藏文書
	弘安七年二月、弘安八年二月	大隅、日向両国の寺同持役所今津後法は、先にこれを御し、要海たるにより、元の如く發回す	近衛家大証加
	弘安九（一二八六）年八月二〇日	大隅守謙千葉宗康、大隅の御家人佐多定重代官吉住統八郎の今津における異國寺同持役勅符の寫了を説す	坂口忠智氏所藏文書

正安二(二二八八)年 八月 一日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人佐多定親の今津における異國警固番役勤務の完了を証す	"
正安四(二二八二)年 九月 三日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人が多少の親代官を勤めて銀の今津における異國警固番役勤務の完了を証す	"
正安五(二二九〇)年 十二月 二十四日	大友親時、恰三郎今江經顯寺院主職を同寺家徒に安堵す	大泉坊 文吉
永仁二(二二九四)年 八月 二日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人伊佐敏房古次郎次郎三郎の今津越前における異國警固番役勤務の完了を証す	坂口忠智氏所蔵文書
(年未詳)	為清、因所帯にあて、本年の今津における異國警固番役を免除せられしことを伝う	"
永仁四(二二九六)年 九月 七日	定時、大馬の御家人佐多阿古二郎の今津における異國警固番役勤務の完了を証す	"
永仁五(二二九七)年 八月 朔日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人佐多阿古二郎の今津越前における異國警固番役勤務の完了を証す	"
正安一(二二九九)年 二月 八日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人佐多權繼代官兵衛四郎忠忠の今津越前における異國警固番役勤務の完了を証す	"
正安二(二三〇〇)年 閏七月 十六日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人佐多權繼代官兵衛四郎忠忠の今津越前における異國警固番役勤務の完了を証す	"
正安三(二三〇一)年 七月 十五日	大馬守藤下清盛、大馬の御家人佐多權繼代官兵衛四郎忠忠の今津越前における異國警固番役勤務の完了を証す	"
嘉治二(二三〇五)年 閏二月 二十九日	為政、大馬の御家人佐多權繼の今津における異國警固番役勤務の完了を証す	"
延應四(二三一二)年 五月	今津任人定光等、伊勢水鏡との志上社神宮司白一町町役に関する糾紛について、三榮法行に裁否を尋ねられ、急遽の御取次を頼みんことを言上す	広瀬正雄氏所蔵文書
"	今津任人定光等、重ねて裁否を尋ねんことを言上す	"
貞長二(二三一一)年 六月 二日	中務次家成、今津勝安寺並びに木下洞院内の發生を証す	勝福寺 文書
建永一(二三四四)年 六月 十五日	氏綱等頼家、治土方・本殿方の兩政所をして、今津勝安寺兼家光心の評えにより、同寺馬免田実成を内田地五町を同寺に抄法す	大泉坊 文書

建武二(一二三五)年 七月 七日	僧寺地、今津勝福寺住持戦寺田等を造覆侍者に譲与す	勝福寺文書
建武三(一二三六)年 四月 二二日	某、今津勝福寺々領の勸料を免す	"
" 四月 二〇日	僧取忠、今津安原寺領今津勝野四至界を安堵す	大泉坊文書
" 六月 〇日	義兼、怡王庄友水方全丸内今津松原新田山野を勝福寺に寄進す	勝福寺文書
建武四(一二三七)年 一月 二〇日	僧取忠、怡王庄六郎丸分目名王尼明信と同任本津住人彦三郎頼朝の占池日三段に關する相論を裁し、明信に知行せしむ	広瀬正雄氏所藏文書
" 一月 一八日	怡取忠、怡王庄六郎丸分目領主明信と今津住人彦三郎頼朝の田地一町五段半ならびに田地等に關する相論を裁し、明信に知行せしむ	"
應永二(一二三九)年 九月 一八日	某、今津勝福寺津内の海亂狼藉を禁す	勝福寺文書
貞和六(一二五〇)年 十一月	今津勝福寺住持義規、勝福寺々領の安堵を請う(おそろく足利政冬に対してであろう)	大泉管内志所収 勝福寺文書
正平九(一二五四)年 七月 一八日	頼朝、頼朝兩人、今津勝福寺に出進一町を寄進す	大泉坊文書
延文三(一二五八)年 四月 一〇日	足利尊氏、今津勝福寺領に守護地頭らの煩らいを成し、檢断をすることを禁す	勝福寺文書
" "	足利尊氏、怡王庄全丸内風山田口辰等を勝福寺に安堵す	"
延文四(一二五九)年 三月 二日	足利義隆、今津勝福寺に怡王庄友水方元國山福名地頭職を安堵す	"
" "	足利義隆、勝福寺知行の今津妙蓮田屋敷等を安堵す	"
" 七月 五日	足利義隆、今津安原寺の天下尊嚴の新持尊政をうけとる	大泉坊文書
延文五(一二六〇)年 六月 一七日	藤原氏晴、今津方福寺領田地一町を勝福長寺老方外和尙に安堵す	勝福寺文書

貞治二（一二六三）年 四月一〇日	島津良久、子の氏久に所領を譲る、中に大野守盛領筑前国今津村あり	島津家文書
応安七（一二七四）年 七月二六日	沙弥幸阿、今津警願寺に粟野を寄進す	大泉坊文書
天文七（一五三八）年 三月二九日	白作親通、牧園中務玄に志麻郡定直職、今津四所發志免向社領を安堵す	見玉菴採集文書
（右開年か） 二月二五日	白作親孝、定直中務承にあてて、今津四所發志免向社領のことを報す	〃
天文八（一五三九）年 二月一八日	白作親時、定直中務承に、志麻郡今津の内四所發志免向社領を安堵す	〃
（年未詳） 九月一三日	白作親時、成松与一左衛門にあてて、今津四所發志免向社領のことを報す	〃
元龜二（一五七二）年 七月一〇日	定直林広、怡土庄志麻郡内今津村四所發志免向社領口數埋付を告ぐ	〃
（年未詳） 三月二七日	今津老中、怡土庄堂丸名の厨付を書く	〃
（天正一二年か） 閏八月一三日	某、怡土庄今津の内の浮付を告ぐ	〃

【備考】中世の今津に関するおもな著書・論文・史料集としては次のものがある。

中山半次郎「博多津沿革に関する私見」（『歴史地理』二七一―七五）

森 克己「日実貿易の研究」（国立書院）

新藤 常一「筑前国今津史料」（九州荘園史料叢書）

正木亨二郎「筑前国今津史料」（九州荘園史料叢書）

多賀 宗集「宋語」（吉川弘文館人物叢書）

四宮 敬「福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について―大陸船政の断片と銀紙―」（『九州文化史研究所紀要』二二）

大正五年

昭和二十三年

昭和三十八年

昭和四十年

昭和四十二年

附表 3 北九州沿岸地域における蒙古石一覽表

1909 年現在

尾	所在地	種名	高さ (m)	石質	所在	発見年月日	報告・文献	調査地指定
1	福岡市博多港	海中	2.28	花崗岩	福岡市大字南町西町宮	昭和 23・24		
2	福岡市博多港	海中	2.22	花崗岩	福岡市大字南町西町宮	昭和 15・10・4	『考古史蹟』地之巻 (川上市太郎)	昭 34. 3月
3	福岡市博多港	海中	2.11	花崗岩	天守中央公民館	昭 7.		昭 34. 3月
4	福岡市博多港	海中	1.94.3	花崗岩	運輸省博多港工務事務所			
5	福岡市博多港	海中	(一説文相)	花崗岩	福岡市北橋山町北橋山公園			
6	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市北橋山町北橋山公園			
7	福岡市博多港	海中	2.07	花崗岩	もとは福岡市品川町品川公園			
8	福岡市博多港	海中	2.47	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
9	福岡市博多港	海中	2.09	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
10	福岡市博多港	海中	(一説文相)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
11	福岡市博多港	海中	2.50	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
12	福岡市博多港	海中	2.06	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
13	福岡市博多港	海中	(一説文相)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
14	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
15	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
16	福岡市博多港	海中	1.89	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
17	福岡市博多港	海中	2.18	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
18	福岡市博多港	海中	2.06	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
19	福岡市博多港	海中	2.24	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
20	福岡市博多港	海中	0.98	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
21	福岡市博多港	海中	21.0	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
22	福岡市博多港	海中	2.90	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
23	福岡市博多港	海中	2.68	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
24	福岡市博多港	海中	2.17	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
25	福岡市博多港	海中	2.38	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
26	福岡市博多港	海中	(一説文相)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
27	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
28	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
29	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			
30	福岡市博多港	海中	(“ ”)	花崗岩	福岡市品川町品川公園			

注、1「石川」の 5・5、No. 1、2、3、4、8、9、10、11、18、19、20、21、22は福子川堤防(古石)の崩壊に K、D、他は『考古史蹟』地之巻(川上市太郎)による。

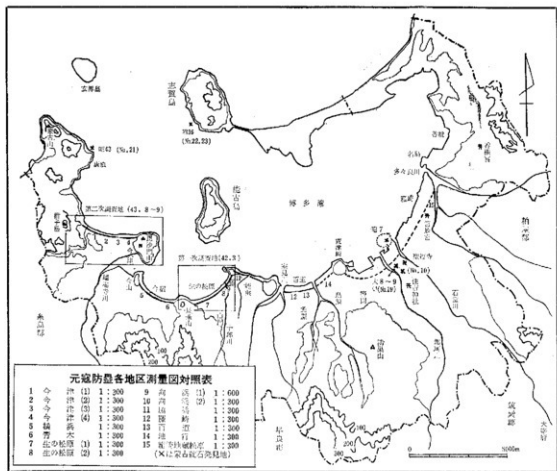
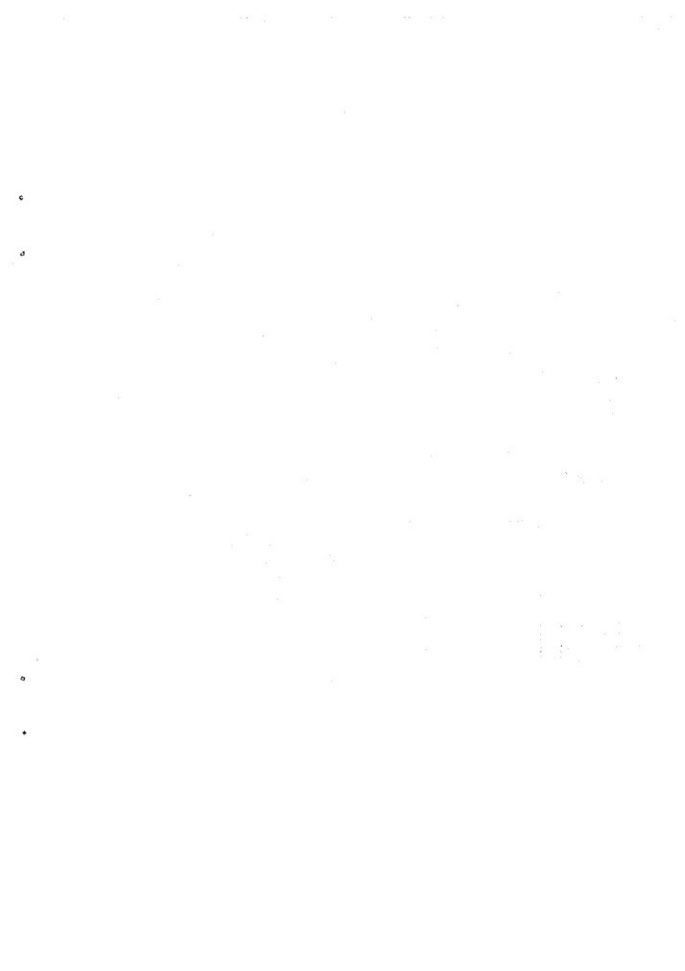


图 1. 蒙古袭来关系地图





PL. I 今津松原と元寇防塁 左上の島は能古島、山は毘沙門山（△183m）手前は大原部落、松原中に白くつらなっているのが元寇防塁線である。

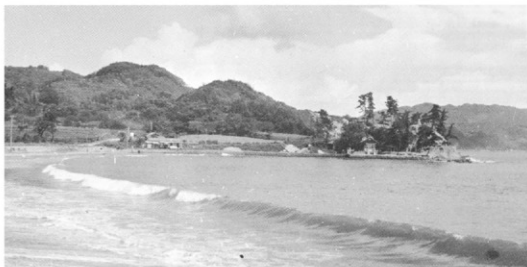


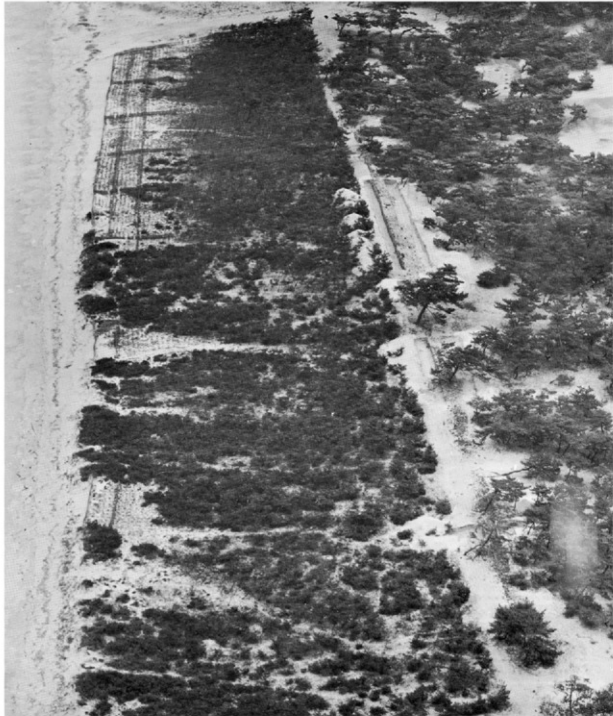
PL. II 1. 今津・毘沙門山と元寇防塁線 2. 毘沙門山西麓の防塁全景 (Ⅳ区-2)





P.L. Ⅲ 1. 津舟崎と大原部落 2. 津舟崎の遠望





PL. IV 今津・緑町の元寇防塁全景(Ⅲ区-0-20)



P.L. V 今津・緑町の元寇防塁前面 (Ⅲ区-12~20)

P.L. VI 1. (上) 今津・大原の防塁前面 (I区-3) 2. (下) 今津・大原の防塁前面 (I区-2)



E

W

E

W





W

1. 今津・長浜の防塁後面（Ⅱ区-3）左側が玄武岩、右側は花崗岩

E

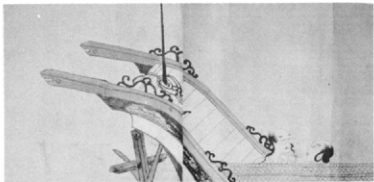
E

2. 今津・緑町の防塁前面（Ⅲ区-14）左側が玄武岩、右側は花崗岩

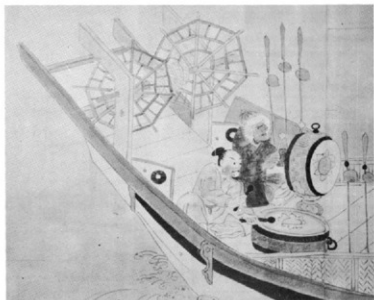
W



1. 「蒙古襲来絵詞」にみえる
碓石



2. 「全」にみえる碓石を巻
揚げる車輪
(「絵詞」は宮崎県立博物館・
松平本による)



3. 4.
福岡市唐泊発見の碓石
全長2.24m



調査関係者

九州大学

文学部

鏡山 猛 (調査団長) 岡崎 敬 森 貞次郎 小田富士雄
 久保山教善 亀井 明德 佐田 茂 塩屋 勝利 高倉 洋彰
 藤口 健二 真野 和夫 前川 威洋 松本 肇 西 健一郎
 米田 鉄也 (考古学) 箭内 健次 新城 常三 川添 昭二
 木村 忠夫 山口 华正 (国史学)

工学部

太田 静六 土田 充義 佐藤 浩 山本 輝雄
 古賀 正光 (建築学)
 山内 豊聰 時津 俊次 安原 一哉 森 巖 (K工土木学)
 坂田 武彦 (冶金学)

理学部

種子田定勝 湯島 勝相 辻 和毅 中村 真人 松岡 繁雄
 若松 久志 (地質学)

医学部

永井 昌文

福岡教育大学

波多野暎三 川述 昭人 森田 勉 小川 雄峰 与小田 寛

宮崎大学

遠藤 尚 (地質学) 岩永 哲夫 福井 修

熊本大学

松本 雅明 佐藤 伸二

糸島高校

小川 一 大神 邦博 郷土部部員

福岡県文化財専門委員 佐藤 敬二 筑紫 豊

福岡県地方史研究者 田中 政喜 橋詰 武生 三島 格 板屋 猛

福岡県教育委員会 結城 爾夫 伊藤 薫 岩下 光弘 渡辺 正気 猿渡 公一

協力団体、機関 朝日新聞社航空部、今津自治会、今津婦人会、今津公民館

測量委託業者 東邦測量設計株式会社、株式会社ダイヤコンサルタント福岡営業所

福岡市、福岡市教育委員会

阿部 源蔵 長東 正之 大観 富繁 樋口 辰美 下川辺 広
 入江 重明 青木 崇 清水 義彦 野上 淳次 石橋 博
 山口 俊二 中島三枝子 花田 薫 下 悦子 荒川 芳弘

福岡市文化財専門員

下条 信行 橋口 達也 柳田 純孝 (専任主任)

福岡市
今津元寇防塁発掘調査概報

昭和44年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社

The 2nd Preliminary Report on Archaeological Research
at the IMAZU Stone-Barriers in Fukuoka City against Mongol Invasion of 13th century*
carried out in 1968, by Fukuoka City and Kyusyu University

FUKUOKA CITY 1969